

平成17年度 児童・生徒指導推進委員会協議のまとめ

望ましい人間関係を構築する能力を育成するための
指導・援助の在り方

栃木県教育委員会

はじめに

心豊かな栃木の子どもを育てるため、学校を中心に展開する児童・生徒指導に関し、有識者や学校関係者等から幅広い提言を得ることを目的とした本委員会は、今年度で5年目を迎えました。これまで本委員会においては、不登校や暴力行為、あるいは適切な判断力などをテーマとして取り上げ協議を行ってきました。これらの問題は、いずれも今日の児童・生徒指導上の重要な課題であります。対症療法的な指導だけでは、根本的な解決を図ることはできません。そこで、本県におきましては、子どもたちの成長を、幼児期の段階からの計画的な指導・援助により促していくという考え方を基本とし、それぞれの発達段階ごとの指導目標を明確に定めながら、その達成に向けた指導を継続的に行っていく児童・生徒指導の展開を推進してまいりました。本委員会においても、発達課題の達成に視点を置きながら、それぞれのテーマに対する指導・援助の在り方を検討してきたところで

す。

今年度の本委員会では、望ましい人間関係を構築する能力の育成をテーマにしました。言うまでもなく、私たちの日々の生活は、すべて社会とのかかわりの中で成り立っているものであり、学校においても、一人一人の児童生徒に対し、社会に適応しつつ自己実現を図ることができる能力や態度を育成することが求められています。特に、他者を尊重する態度のもと、お互いの思いを伝え合い、協力しながら課題を解決することができる能力や態度を身に付けることは、これからの社会を生きるすべての子どもたちにとって必要となることです。

本来であれば、他者と適切にかかわる力は、学校や地域社会における集団活動や他者とのふれあいを通じて身に付けていくものです。しかし、今日の社会においては、一見集団での生活が成り立っていると見えながら、実態としては人間関係が希薄であったり、他者とのかかわりを煩わしく感じ、これを回避しようとする世間の風潮があるため、集団生活を基本とする学校は、人間関係づくりのために大きな役割を担う場となっています。

これまで、県教育委員会においても、人間関係づくりに関する各種の指導資料を作成してきましたが、今回は、発達課題の視点に基づきながら、指導目標のもとに様々な活動を体系化した取組の在り方を指導計画の事例としてまとめました。本書が、各学校における指導目標の達成を目指した指導計画の作成や実践のための参考資料として、活用していただけることを期待しています。

最後になりましたが、本委員会に御尽力いただきました橘川委員長をはじめ、すべての委員の皆さま方に心より御礼申し上げ御挨拶といたします。

平成18年3月

栃木県教育委員会教育長
平 間 幸 男

目 次

はじめに

1	協議のねらい	1
	(1)協議題設定の趣旨	
	(2)望ましい人間関係を構築する能力について	
	①標題について	
	②個人と集団に求められるもの	
2	児童生徒の人間関係をめぐる現状と課題	3
	(1)現状	
	(2)課題	
3	発達段階ごとに育成することが期待される能力や態度	5
	(1)発達段階の区分	
	(2)人間関係を構築する能力を育成するための観点	
	(3)発達段階ごとに育成することが期待される能力や態度（表）	
	(4)育成することが期待される能力や態度の具体的な内容	
4	指導計画の作成	7
	(1)指導計画の必要性	
	(2)指導計画の構成と内容	
	①中心となる活動の設定	
	②事前準備から事後評価までの計画的指導の展開	
	③教育活動全体とのかかわりを持たせた体系的な指導計画の作成	
	④保護者や地域との連携	
	⑤指導計画の見方について	
	(3)指導計画の事例	
	事例1（幼稚園） あかみ幼稚園	9
	劇づくりを通じた人間関係づくりのための指導・援助の在り方	
	事例2（小学校1） 上三川町立坂上小学	17
	縦割り班活動を活用した人間関係づくりのための指導・援助の在り方	
	—運動会を中心とした異年齢集団の人間関係づくり—	
	事例3（小学校2） 佐野市立三好小学校	24
	修学旅行を活用した人間関係づくりのための指導・援助の在り方	

事例4 (中学校)	真岡市立真岡東中学校	・・・・・・・・・・	32
	合唱コンクールを活用した人間関係づくりのための指導・援助の在り方		
事例5 (高等学校)	県立大田原高等学校	・・・・・・・・・・	39
	学校祭クラス参加を活用した人間関係づくりのための指導・援助の在り方		
5	児童生徒による自己評価、教員による児童生徒理解のためのチェックシート	・・・・・・・・	46
	(1)チェックシート内容及び構成、活用の仕方		
	①評価項目について		
	②評価の記入方法について		
	(2)チェックシートの活用方法や効果		
	①児童生徒の活用		
	②教師の活用		
	③効果		
	(3)チェックシート		
	①小学校高学年用	・・・・・・・・	48
	②中学校用	・・・・・・・・	49
	③高等学校用	・・・・・・・・	50
6	平成17年度 児童・生徒指導推進委員会委員	・・・・・・・・	51
	これまでの主な指導資料等	・・・・・・・・	52

1 協議のねらい

(1) 協議題設定の趣旨

暴力行為・いじめ・不登校等の問題行動等や少年非行など、今日、私たちは多様化・深刻化する児童・生徒指導上の諸問題に直面している。これらの諸問題には、一人一人の個別の事情や社会背景等が複雑に絡み合っているところであるが、他者への思いやりの心や、相手の立場に立って物事を考える能力や態度の希薄さ、倫理観や規範意識の欠如などは、共通した要因として考えることができよう。つまり、総じて人と適切にかかわる力が身に付いていないのである。そして、このことは、問題行動等ばかりに限ったことではなく、今日のすべての児童生徒に見られる傾向として、様々な場面において指摘されているところでもある。

私たちの日常生活はすべて他者とのかかわりによって成り立っており、社会は、基本的に価値観やものの考え方が異なる人間同士で構成されている。円滑な社会生活を営むためには、適切なコミュニケーション能力や自己表現能力などをもとに、お互いが価値の共有化を図ったり、互いの存在を理解し尊重し合い、よりよい人間関係を築こうとする姿勢が必要になる。日常生活において、他人との意見の相違が生じたり、トラブルが生じるのは当然のことであるため、生きる上で大切なことは、それを必要に応じて回避したり、または修復・改善できる力をしっかり備えることである。しかし、今日の社会環境は、利己主義が潮流となったり、人間関係が希薄化・閉塞化、またメディアを媒体として間接化する状況にあるなど、他者とのかかわりが表面的なものになりやすい状況になっている。このように、人間関係をめぐる問題は、第一義的には社会全体の環境に起因するものであるが、だからこそ、学校教育においては、集団での活動を基本とするという教育形態の特性を踏まえ、児童生徒に他者とかかわる力を身に付けさせるための意識的な取組がこれまで以上に求められるのである。

そこで、今年度の本委員会においては、これまでの推進委員会における発達課題の考え方を踏まえながら、児童生徒が適切に他者とかかわることができる力を身に付けるための指導・援助の在り方について具体的な方策を協議するとともに、各学校において指導の参考となる指導計画の在り方を提示することとした。

(2) 望ましい人間関係を構築する能力について

① 標題について

人間関係に関する能力については、「伝え合う力」、「他者とかかわる力」や「対人関係力」など、様々な表現や定義の仕方があるが、本委員会の協議題としては「望ましい人間関係を構築する能力」と表現することにした。

以下は、それについての補足的説明である。

ア 「望ましい人間関係」

- 他者との間で、互いの人格を尊重し合う意欲や態度が成り立っている関係
- 他者との相互信頼が成り立っている関係
- トラブルや問題が生じた際に、共に力を合わせて解決しようとする意欲や態度が成り立っている関係
- それぞれが主体性を持ち、自分の意思や考えを表現することができる関係
- 集団内での少数の意見や考えを尊重することのできる関係
- 特定の間人同士の中で完結した閉鎖的な関係ではなく、新たな人間との出会いの中で、異なる意見を理解していこうとする意欲や態度が保たれている関係

○互いによりよい在り方や生き方を求め、高め合っていくことができる関係
イ 「構築する能力」

○自ら意図的、積極的に他者との関係を作り上げることができる能力、及び無作為・自然に形成された人間関係であっても、他者の存在意義を尊重し、好ましい関係に作り上げることができる能力

②個人と集団に求められるもの

ア 個人に求められる能力や態度

望ましい人間関係を構築する能力について考える場合、まず、それを構成する能力や態度（スキルを含む。以下同様）を具体化させることが重要になる。

本委員会においては、望ましい人間関係を構築する能力を構成する具体的な能力や態度として、以下の項目を設定した。

<p>○自己理解</p> <ul style="list-style-type: none">・自分には、どのような特徴や興味・関心があるか、自分はどのような環境に置かれているか、自分は将来に対しどのような夢や希望を持っているかなどについての客観的、具体的な認識
<p>○他者理解</p> <ul style="list-style-type: none">・相手の性格やものの考え方及び価値観、能力、特技、興味・関心、行動様式等についての理解
<p>○共感性</p> <ul style="list-style-type: none">・相手の体験及び感情や心的状態、考えなどを、自分の体験として同じように感じたり、理解したりする資質や能力
<p>○協調性</p> <ul style="list-style-type: none">・相手との人間関係を円滑に進めようとする態度のもと、共通の目標に向けて行動することができる能力や態度
<p>○適応力</p> <ul style="list-style-type: none">・自己の所属する集団（家庭、学校、学級、友人グループ、地域社会等）の現状及び変化、要請などに対し、自らが主体的、意識的に働きかけたり変化することにより、調和のとれた良好な人間関係や生活環境を作り出すことができる能力
<p>○規範意識</p> <ul style="list-style-type: none">・自己の行動選択や善悪の判断基準として法律的知識や社会規範が身に付いていることや、自己の属する集団の秩序を尊重する態度、自己の行為に伴う責任の自覚や権利と義務に関する正しい理解など、集団や社会の中のルール、約束事を守ろうとする資質や能力、態度

○表現力

- ・自分の気持ちや感情、思考を言葉や態度により外に表現する能力で、外部に向け、自分の考えを表そうとする意欲とともに、それが自分以外の人間や集団等に受け入れられるような適切な手段や方法に基づいて表すことができる能力

○コミュニケーション能力

- ・相手に自分の考えなどを適切に表現することができるとともに、相手からの話をきちんと受け止め、理解しながらそれに応じて言葉を返し、相手との間に意思の疎通を成り立たせることができる能力

○問題解決能力

- ・他者や集団とのかかわりの中で生じたり、集団あるいは自分自身に生じた問題について、他人と協力し合ったり意見を傾聴しながら、自ら積極的に問題の解決を図るために行動することができる能力や態度

イ 個人と集団との関係

望ましい人間関係を構築する能力を身に付けるためには、個人の資質や能力、態度とともに、個人が所属する集団自体が、どのような質のもとにまとまりを形成しているのか、ということも重要な要因となる。そこで、求められる集団の特質を、次のように考えた。

- 構成員それぞれの人格が尊重された集団
- 自由な話し合いによって物事を決定していくことができる集団
- 共通の目標を持つ集団
- 規律のある集団
- 連帯感のある集団
- 構成員のそれぞれの役割が明確化された集団

なお、個人と集団との関係については、児童生徒の発達段階によって、比重の置き方に違いが生じる。例えば、幼児期であれば、まず集団作りよりも個人の能力等を引き伸ばすことが中心となり、集団作りの意味がより重要になってくるのは、小学校になってからと考えられる。

2 児童生徒の人間関係をめぐる現状と課題

本委員会の委員からは、それぞれの立場から見た今日の児童生徒の人間関係をめぐる現状と課題について、以下のような意見が出された。

(1)現状

- 3歳の入園児の様子が、既に以前と違ってきている。言葉の発達が以前の園児と比べ落ちている。「かして」とか「やだよ」とか言えず、噛みついたり叩いたりするなど、自己主張が暴力的となってきている。言語表現がなされない子どもが増えてきている。
- 幼稚園の先生からは、最近の子どもはこだわりが少ないと聞く。3歳児で入園してくる時点で、お母さんからよい子圧力（「よい子にしていなくてはいけませんよ」）

がかかっているらしい。自分を発揮しながら何かにかかわっていく経験が、昔に比べて少なくなってきた。一般に自我が芽生える3歳くらいの時期は、自己主張が目立つようになってくるが、それがなかなか見られない傾向もあり、今は、自我の育ちが弱くなっているのかもしれない。

- 特に小学校の高学年の児童であるが、言葉でのコミュニケーションがうまくとれない。トラブルを回避する能力がないし、それ以前に、問題が起きそうになると話を終わらせてしまうなど、トラブルを避けてしまう様子が見受けられる。以前から比べると喧嘩は減ってきているが、それは嫌だったら喋らない、付き合わないという態度からきている。
- 単語でのコミュニケーションが多い。自分の思いを正しく伝えられなくて、「消しゴム」とか「水」とかで終わらせてしまう。家庭ではただそれだけで要求が満たされてしまうのだろうが、学校では相手に誤解を招き、自分の思いが通じなくてイライラしてしまう場面が見受けられる。ただし、時間の余裕もなくなっているのも事実で、放課後遊ぼうと思っても友達は塾通い、または不審者情報が出て「一人では遊びに行っちゃいけません」と親に注意され、なかなか一緒に遊ぶ時間や場所もなく、触れ合う機会が減ってきている。
- お互いに傷つけたり、傷つけられたくないとの思いから、深く立ち入らない表面的な関係が以前より増えている。大きな集団で何かをしようというのではなく、小集団でこじんまりとまとまり、いじめられることを心配してか、誰かの意見に同調してしまい、自己主張しない。
- 中学生以上の生徒が、「友人関係に疲れる」と言っている。誰かと一緒にいないと独りぼっちになってしまうのでどこかのグループには所属するが、心から楽しいと思っていないわけではない。一緒にいるためには、周りに合わせなければならない。
- 自分がどう思っているのか、自分がどう感じているのかすらもわからない。自分の感情を相手に伝えることができない。これは、小さい頃から母親に「そんなこと言わないで頑張りなさい」とか、「そんなこと言っちゃダメでしょう」と言われてきたことも関係している。
- 一室に4～5人いながらマンガを読んでいる者、ゲームをしている者、携帯電話を使っている者など、それぞれが個々の活動をしている。それでも仲間と認識している。
- 中学校から高校へ、1年生から2年生へと新たな段階で友だちを作っていくものだが、新しい友だち作りができない。原因はわからないが、新しい環境になっても新しい友だちを作ろうとしない。
- 先輩と後輩、大人と子どもという認識がない。「～さん、～ですか」という言葉は出てこない。いずれも同級生と喋っているのと同じである。また、教師に対しても同じである。
- 適応指導教室に来る中学生は、「疲れる」とよく言う。人間関係に疲れている。コミュニケーション能力が不足しており、相手と話すことが苦手ということもあるが、相手が嫌な思いをすることに関しては極力話さないしかかわろうとしない。何か嫌なことがあると、次の日には休んでしまうし逃げてしまう。かかわらないことで、バランスを保とうとする。

(2) 課題

- 意見のぶつかり合うような場を意図的に設定し、集団の中で自分を表現（自己主張）するような体験が必要である。更に、学校の日常生活の中で、自然体験や生活体験を通して、「豊かな心（美しいものを美しいと感じられる心等）」を意図的に育てていく必要がある。
- 自分の気持ちを相手にぶついたら、相手にもそれに応じる気持ちや反応があるということを分からせることが必要である。人間関係は体験しながら学習していくものであり、そのためには時間のゆとりが必要である。
- 5歳位になると場の雰囲気が分かってくる。意図的な集団活動の中で、葛藤を経験させる必要がある。人とかかわることが楽しい、おもしろいという経験をたくさんさせることが大切である。
- 適応指導教室にいる子どもたちは、大人に対する信頼感を失ったり、子ども同士のいじめにより、友だちへの信頼感を失い傷ついている。また、コミュニケーションが上手でない子がいる。その子どもたちに、自分に寄り添ってくれる人がいるということを実感させることにより、信頼関係を回復させることが必要である。
- 子どもたちを育てていくためには家庭も重要な役割を担っており、それは保護者自身も認識している。しかし、具体的にどのようにかかわればよいのか分からない部分もある。学校は保護者に対し、家庭での指導の在り方について更に啓発を図る必要がある。

3 発達段階ごとに育成することが期待される能力や態度

不登校の未然防止をテーマとした平成14年度の本委員会において、発達段階ごとに達成すべき目標（＝発達課題）を明確に位置づけた児童・生徒指導の重要性について協議して以来、本県においては、児童・生徒指導の目標の明確化とそれに準拠した指導・援助の実践、つまり発達課題の達成を目指した児童・生徒指導の展開を図っている。

そこで、今年度の委員会においても、望ましい人間関係を構築する能力を育成するため、幼児期から青年期までの発達段階ごとに育成することが期待される能力や態度について、次ページの表のようにまとめた。

(1) 発達段階の区分

幼児期、児童期、青年期の三区分に学校種、年齢を当てはめた。これらは、あくまでも発達段階を複数の視点からとらえてまとめた便宜的な区分である。これらの区分ごとに、人間関係を構築する能力にかかわる、発達上の特徴を示した。

(2) 人間関係を構築する能力を育成するための観点

人間関係を構築する能力を育成するための具体的な観点として、P 2～3で示した通り9観点を設定した。しかし、9観点については、例えば自己理解のように人とのかかわりの基盤として必要になるものと、コミュニケーション能力のように他者との円滑な関係を築くための能力など、人間関係を構築する能力や態度としてのレベルや性質に違いがあり、必ずしも並列的に示すことはできない。そのため、これらをレベルや性質がほぼ共通するグループに分類し整理した。その結果、「自己理解・他者理解・共感性」を「**自他の理解**」、「協調性・適応力・規範意識」を「**他者や集団への適応**」、「表現力・コミュニケーション能力・問題解決能力」を「**他者と交流する実践力**」という三種に分類した。

(3) 発達段階ごとに育成することが期待される能力や態度

発達段階の区分	幼 児 期		児 童 期		青 年 期 (前期)		(中期～後期)	
	保育所・幼稚園		小 学 校		中 学 校		高 等 学 校	
	2～5歳		6～11歳		12～14歳		15～17歳	
人間関係にかかわる能力や態度を育成するための基盤	信頼感の獲得 (自分を受け止めてくれる他者の存在による安心感と自信の基盤づくり)		身近な人々との社会的スキルの形成 (相互交流的に遊んだり、けんかや仲違いの経験を積みながら、人とかかわり方を学ぶ)		社会的スキルの拡大と深化 (自分の考えや感情に基づくとともに、他人の意見や集団のルールに従いながら活動を行い、人とかかわり方や人間関係づくりのためのスキルを深める)		アイデンティティーの形成・確立 (自己の独自性、同一性を認識した上で、あるいは認識するための他者とかかわりの重要性)	
人間関係にかかわる能力や態度	発達段階ごとに育成することが期待される能力や態度の具体的内容 (=発達課題)							
自他の理解	自己理解	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の特徴や長所、短所などに気づくことができる ・友人とかかわりの中で、自分の性格や特性についての理解を深めることができる 						<ul style="list-style-type: none"> ・自分の良さや個性、性格や行動様式、価値観などについて理解し、受け入れることができる ・自分の言動が相手や他者に及ぼす影響がわかる
	他者理解	<ul style="list-style-type: none"> ・自分とは違う考えなどを持つ他人の存在について理解できる ・他者に関心をもつ 		<ul style="list-style-type: none"> ・友人のよいところを認め、励ますことができる 				<ul style="list-style-type: none"> ・相手の状況や立場などを踏まえた上で相手の心情やものの考え方について理解・共感することができる
他者や集団への適応	協調性	<ul style="list-style-type: none"> ・決まりや約束事に従って友人と活動することができる 		<ul style="list-style-type: none"> ・集団のルールや友人の意見に従って活動することができる ・気の合わない友人であっても、ともに活動することができる 				<ul style="list-style-type: none"> ・他人の価値観を尊重し、認めることができる
	適応力	<ul style="list-style-type: none"> ・友人と一緒に遊ぶことができる 		<ul style="list-style-type: none"> ・友人同士の遊びや活動に積極的に入っていける ・新たな環境や人間関係の中で集団活動の意義を理解し、行動できる 				<ul style="list-style-type: none"> ・所属する集団や友人に自ら働きかけたり、自らを変化しながら、望ましい生活環境や人間関係を作ることができる
	規範意識	<ul style="list-style-type: none"> ・生活上のしつけや決まりに従うことができる ・自分たちで生活上のきまりを考えることができる 		<ul style="list-style-type: none"> ・決まりやルールの意味を理解し、自ら主体的に従う態度をとることができる 				<ul style="list-style-type: none"> ・規律の意義を理解し、自立的な態度で生活することができる
他者と交流する実践力	表現力	<ul style="list-style-type: none"> ・不快感、喜び、不満といった感情を表現できる ・場や状況に応じた定型的なあいさつや返事、感謝ができる ・自分の考えをみんなの前で話すことができる ・他者の意見に対して自分の考えを言葉で表現することができる 						<ul style="list-style-type: none"> ・自分の気持ちや感情を、TPOに応じて適切に表現することができる ・論理的な思考に沿って自分の考えを表現することができる
	コミュニケーション能力	<ul style="list-style-type: none"> ・相手からの話しかけに対する受け答えができる ・気持ちの伝え合いができる 		<ul style="list-style-type: none"> ・相手の立場を考慮しながら、感情や考えをわかりやすく伝えることができる 				<ul style="list-style-type: none"> ・自分と異なる意見であっても尊重し、自分の考えを伝えることができる ・相手の考えや意見を真摯に受け止め、自分の考えを協調的・建設的に伝えることができる
	問題解決能力	<ul style="list-style-type: none"> ・困ったことや不快なことを親や教師に伝え、援助を求めることができる ・自分の力で困難なことを解決しようと試みることができる ・教師の仲介などにより自分たちでトラブルを解決することができる 		<ul style="list-style-type: none"> ・問題や課題が生じた際、他者と協力しながらその解決に取り組むことができる 				<ul style="list-style-type: none"> ・問題や課題が生じた際、友人や社会人などに協力を求めるため働きかけるとともに、主体的な態度で、問題の解決に取り組むことができる

【参 考】 児童・生徒指導推進委員会協議のまとめ
 平成14年度 「不登校の解消に向けた方策について」
 平成15年度 「暴力行為を予防するための方策について」
 平成16年度 「場に応じた適切な判断力を育てるための指導・援助の在り方」
 国立教育政策研究所生徒指導センター 「職業観・倫理観を育む教育の推進」(平成14年11月)

(4) 育成することが期待される能力や態度の具体的な内容

9 観点ごとに、発達段階を考慮しながら具体的な内容を示した。これらの内容は、各段階ごとの発達課題としてとらえ、指導目標とすることができる。なお、能力や態度の育成が連続的・継続的に進んでいくことを踏まえ、発達段階の区分ごとではなく、段階間にまたがった表記とした。なお、表記した内容の文章の位置や長さは、その能力や態度の育成が期待されるおおよその時期を示している。

4 指導計画の作成

(1) 指導計画の必要性

望ましい人間関係を構築する能力を身に付けさせるための指導・援助法には、様々なものが考えられる。例えば、学級（クラス）内での人間関係づくりのためには、構成的グループエンカウターの実施を取り入れている学校もあるし、相手の気持ちや立場を考えながら自分の気持ちを相手に受け入れられるように表現する能力を育成する方法としては、アサーショントレーニング等も有効である（「児童生徒の健全育成を目指して(19) ー豊かな人間関係づくりのための10の方法ー（平成14年2月義務教育課作成）」を参照）。一般的に、児童生徒に人間関係を構築する能力を身に付けさせるためには、日常の様々な生活場面における人とのかかわりを通じて、継続的な学習を積み上げていくことが必要である。構成的グループエンカウター等に代表される技法は効果的な指導法ではあるが、限定された時間や場で実施されるものであるため、それらを活用しながらも、更に、教育活動全体の中で、継続的に実施していくことができる取組を工夫することが大切である。

本委員会において何より重視したのは、教育活動全体を通じて、継続的に実施するための方策である。小学校であれば6年間、中学校であれば3年間という就業年限、あるいは1年間、学期、更に1日の学校生活であれば始業から放課までというそれぞれの期間や時間帯の中における様々な活動を有機的に関連させることにより、児童生徒の人間関係を構築する能力の育成を目指すことが重要であるからだ。そして、こうした活動を展開するための基盤として、教育活動全体を視野に入れた指導計画を準備することが不可欠となるのである。

そこで、P 6の発達段階ごとに育成することが期待される能力や態度の表に基づき、望ましい人間関係を構築する能力の育成を図るための指導計画を、幼稚園から高等学校までの学校種ごとに全部で5事例作成し、P 9～45に示した。

(2) 指導計画の構成と内容

① 中心となる活動の設定

教育活動全体の中において、人間関係を構築する能力の育成を図るために最も効果的な指導を展開することができるのが、特別活動の時間である。集団活動を特質としている特別活動には、児童生徒の人間関係を拡充し、思いやりの心や共に生きていく態度等を育成するなどの教育的意義がある（小学校学習指導要領解説特別活動編）。そこで、様々な教育活動の中から、人間関係を構築する能力の育成のための活動の場の中心として特別活動を取り上げ、指導計画の作成を試みた。

なお、幼稚園の場合は、小学校以上の学習指導要領に示されている特別活動は位置づけられていないため、集団活動を核として指導計画を作成した。

②事前準備から事後評価までの計画的指導の展開

特別活動はどの学校においても実施されているが、ここでは、人間関係を構築する能力の育成という目標のもと、「事前指導」、「活動実践」、「事後評価」という3つの段階からとらえることにした。特別活動には、活動に至る事前の準備段階において、集団のメンバーが目標の設定、目標達成のための協力、相互の意見の相違を調整するための話し合い活動など、人間関係に関する貴重な学習場面が存在する。従って、事前の段階におけるそれらの意義を十分に認識し、指導計画に意図的に組み入れることによって、一層効果的な指導を展開することが期待できる。更に、事後の評価も重要となる。指導目標に対する成果の程度や残された課題を明らかにすることにより、以後及び次年度の指導の在り方に還元され、指導法の改善等が図られることになる。これら一連の過程を計画的に実施するための指導計画の作成を試みた。

③教育活動全体とのかかわりを持たせた体系的な指導計画の作成

特別活動が、人間関係を構築する能力を育成するために最も効果的な活動だとしても、それは教育活動全体の中の一部であり、人間関係を構築する能力の育成を目指した指導が、他の個々の教育活動においても体系的に実践されることにより、はじめて厚みのある指導へとつながっていく。人間関係を構築する能力の育成という、人間としての在り方や生き方にかかわる非常に大きな目標の達成については、自校における育てたい児童像や生徒像を基盤に、すべての教職員がすべての教育活動を通じてかかわることなくしては、その実現を図ることはできない。

④保護者や地域との連携

学校で、すべての教員がすべての教育活動を通じ、一つの目標の実現を目指した計画的な指導を展開していく際、その目標自体や、児童生徒へのかかわり方や指導の在り方について、保護者との間に共通理解が図られることは重要である。学校での指導方針が保護者にも十分理解され、家庭においても学校と歩調を合わせた指導ができるよう、具体的な連携の内容について示した。また、地域社会も児童生徒の学習の場であることを踏まえ、地域の実情に応じた具体的な連携の在り方も検討した。

⑤指導計画の見方について

以上のように、本委員会で示した5つの指導計画作成の趣旨は、望ましい人間関係を構築する能力を身に付けさせる指導・援助を行う際の重要なポイントとして、

- ア) 活動の目標を明確にすること
- イ) 準備段階から諸活動のねらいを明確にすること
- ウ) 事後評価を行うこと
- エ) 目標の達成を目指すため、他の教育活動との連携を図ること
- オ) 年間を見通した指導計画を作成すること

を重視した。各学校において指導計画を作成する際に、このような視点をどのように生かすことができるかというモデルを示したものである。指導計画の趣旨と事例を参考にして、各校がそれぞれの実態に応じた実質的な年間の指導計画を作成することを願っている。この指導計画は、1時間の授業の指導案の作成様式を示したものでないことについて留意されたい。

(3) 指導計画の事例

事例 1 (幼稚園)

あかみ幼稚園

劇づくりを通じた人間関係づくりのための指導・援助の在り方

1 テーマ設定の趣旨

(1) 園の規模等

① 園児数、学級数

10クラス合計227名で、内訳は、満3歳児（1クラス）、年少組（4クラス）・年中組（2クラス）・年長組（3クラス）である。

② 地域の状況、特色

当園は、栃木県の南部、人口約12万8千人の佐野市の西部に位置し、市の運動公園に隣接している。14,000㎡の敷地に園舎は南向き、東にL字に開いて、保育室から園庭の様子がよく見える。園児の家庭環境は、以前は三世同居の家庭が多かったが、現在は核家族の家庭のほうが多い。また、園児は、市内や隣接する市など広範囲から登園してきている。

(2) 園児の人間関係に関する実態や課題

幼稚園とは、子どもが家族と離れて、初めて社会生活を送る場である。よって、入園当初の様子は、それまで、その子どもが家庭で過ごしてきた“人とのかかわり”が大きく影響する。現代社会において、1人、2人の子どもにたくさんの大人が、過干渉になっている事実がある。また、その一方、普段の育児においては、母子2人きりで過ごし、子どものことを誰にも相談できず、多くの悩みを抱えている母親も増えてきている。年々、新入園の子どもたちの母子分離が難しく、大泣きしたり、一人であることに不安を抱え、保育者と一時も離れられないという姿も増えている。また、言語表現ができず、友だちが使っているものを無言でとってしまったり、いやなことがあると、相手をかんだりたたいたりといった行動を取ってしまう子どもも増加している。入園当初の3歳児の姿としては以前から見られていた様子ではあるが、年々その数が顕著となり、またその状態が続く期間も長くなっている。このように、人とのかかわりが上手くできないことは、小・中・高、そしてその後の成長過程にも大きく影響していくと考える。幼児期における人とのかかわり方は以後の生活における基礎となるものであり、非常に大切な問題であると考えられる。

(3) テーマ設定の理由

2年ないし3年の過程の中で、最終的には言語によるコミュニケーションを図り、自分の力で他人とかかわりが持てるようになって欲しいと願っている。まず始めは、自分の意思の表出、そして、小集団の中での意思表示、最終的には、クラス集団の中で自分の意見を伝えたり友達の意見を受け止めたりして、1つのことを考え決めていくことができるようになってもらいたい。それは、今後の人生の中で、人とのかかわりという部分においての基礎となっていくと考えるからである。人間関係を構築する能力や態度は、1つの活動のみで育成されるわけではなく、いろいろな活動を通じた友だちとのかかわりの中で育っていくものであるが、特に、友だちとかかわりながら作り上げていく劇づくりを、大きな“節目”としてとらえ、取り上げることにした。

(4) 目標

① 自分の意見や思いをことばや態度で伝え、話し合いを進められるようにする。

(コミュニケーション能力)

② 意見の対立などの問題も予想されるが、保育者や友達に助けられながら、自分たちで解決できるようにする。(問題解決能力)

③ 自分の意見のみを押し通そうとするのではなく、他人の意見にも耳を傾けることができるようにする。(他者理解・共感性)

④ 自分勝手に行動するのではなく、クラスの仲間と協力しながら進められるようにする。

(協調性・規範意識)

- ⑤グループの仲間やクラスの前で、自分の意見を話したり、アイデアを絵で表したりできるようにする。(表現力)

2 取組の方針

- (1)年度始めは、担任と各園児の関係作りを大切にする。また、担任は、子ども同士の仲間関係を観察する。
- (2)友達を認め合えるような場面作りをする。
- (3)他人に同調するのみでなく、自分で考えたことを発言することができるような雰囲気作りや援助を行う。
- (4)積極的な子どものみの意見で話し合いが進んでいかないよう、積極的な子どもの良い面を認めつつみんなから意見が出るようにする。
- (5)話し合いとは、意見のぶつかり合いがあっても当然である。ぶつかり合った上でみんなで考え、納得して方向性を出していけるような関係を築く。(合意の形成)

3 指導内容

(1)概要

①年齢及び時期

〈5歳児〉年長組、1月下旬～2月中旬

②当日までの流れ

- ・クラスみんなで、どんなことを行いたいのか考える(前年度、年長組の劇を見たことで、劇の方向に決まる)。
- ・クラスの話し合いで、まずどのような役があるとよいのか、自分は何の役がやりたいか配役を決める。その後ストーリーを決める(配役決めを先に行なうことで、ストーリー決めの時、クラスの話し合いを自分の事としてとらえ、話し合いに臨みやすいと考える。しかし、進め方はいろいろな方法がある)。
- ・配役ごとの小グループの中で、大道具・小道具・衣装などを相談して作ったり、自分たちのセリフを考えたりする。
- ・クラス全体でストーリーを中心にもう一度確認し、イメージの共有化を図る(保育者がひとりで進めてしまうのではなく、子どもたちの発言で確認していく)。
- ・実際に動いて演じてみる(その中で、自分の役以外の友達から道具やセリフについて、良い点や工夫したほうが良い点などを挙げてもらい、その意見を受け止めたり、自分の意見を述べたりする)。
- ・他クラス、他学年の友達に見せることで、お客さんに対して“演じる”ということ意識しながら行う。
- ・他クラス、他学年の友達からの感想や意見を受け止め、より良い方向に進むように自分たちで考え、工夫する。

(2)指導計画

※表中の□は、P6の「発達段階ごとに育成することが期待される能力や態度」の表の9観点のうち、それぞれの活動における主なねらいとなるものを示した(以下の指導計画事例においても同様)

活動内容	「人間関係づくり」のための指導上の工夫・留意点等
1 当日までの活動 ・劇の発表に向けて、どのようなことがやりたいか子どもたちと相談する。	・いろいろな意見が出てくることが予測される。人間関係が構築される“劇”が良いと思われる。しかし、教師が一方向的に決めてしまうのではなく、いろいろな意見を聞く。 (コミュニケーション能力)

- ・自分は、どんな役になりたいか考え決める。
- ・ストーリーを決める。
- ・役ごとでの話し合いの場を大切に考えているので、1つの役を複数の子どもたちで演じられるよう配慮する。(協調性 適応力)
- ・積極的な子どもの意見だけで話し合いが進んでいかないようにみんなの意見が取り入れられるよう配慮する。

こんなときどうするか1

影響力のある一部の園児の意見がクラス全体の方向性を決定してしまう。

影響力のある子どもが発言すると、周りの子どもたちもその意見に流されがちです。それが、保育者が意図する意見だったりすると保育者自身もその意見に同意しがちではないでしょうか。しかし、そこはぐっとこらえて、いろいろな子どもの意見を聞きたいものです。話し合いがいつもそのようになりがちな場合、話し合いを始める前に、みんなの前でなかなか発言できない子どもの意見を聞いておきましょう。保育者が受け止めることにより、みんなの前でも発言しやすくなります。そのことにより、クラスの中でいろいろな子どもが、自信を持って発言できるようになります。

こんなときどうするか2

自分の意見だけを主張し他人の意見に耳を貸さない。

まず、周りの子どもたちもしっかり意見が言えるようになることが大切です。周りの子どもたちが意見を言えるようになると、クラスの子どもの同士のやり取りが生まれます。そのやり取りが大切です。また、自分の意見ばかり押し通そうとし、他人の意見を少しも聞こうとしない子ども本人に保育者が伝えるのではなく、クラスの仲間が伝えていくとよいでしょう。本人が、日々の生活の中で“他人の考えを取り入れていくとよりよい方法になる”という経験をたくさんすることが大切です。

話し合いが一日で決まらない場合は、翌日に持ち越して話し合う必要もあるでしょう。また、ルールのある遊びやゲームなどを普段の生活の中で意識的に取り入れることにより、協調性も養われてきます。

- ・大道具、小道具、衣装などの設計図を描く。
- ・役ごとに、大道具、小道具を作る。
- ・役ごとにセリフを考える。
- ・役ごとに共通のイメージが持てるように、言語、描画などで共通の認識が図れるようにする。(表現力 コミュニケーション能力)
- ・一人のイメージで作業が進んでしまわないように、保育者が相談の場面を見守り、場合によっては「○○ちゃんそれでいいの？」

<ul style="list-style-type: none"> ・クラスの子どもたち全員で出来上がったストーリーの再確認をする。 ・実際に演じる。 ・他のクラスとお互いに“みせっこ”をする。 	<p>などと、みんなで決めていくということを再認識しつつ話し合いを進める。 (コミュニケーション能力)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・消極的な子どもが他人任せになってしまいそうな場合は、保育者もその話し合いの輪に入り、みんなで考えていこうとする姿勢が持てるよう援助する。 (コミュニケーション能力) ・各役ごとに作業を進めた後、もう一度クラス全体でストーリーの確認をして共通のイメージを持ち、今後の活動の中でのやりとりを持ちやすくする。イメージが共有化されない部分については、その場で確認していく。 ・自分以外の役の友だちの動きに関心を持ち、クラス全体のことを自分のこととしてとらえ、アイディアを出したり意見を述べたりできるように援助する。 (共感性) ・初めて役になりきって演じるとき、ストーリーの中にあまり必要のない動きが含まれる場合もある。どのように表現したら見ている人にとってわかりやすいか、クラスの子ども達からアイディアを求め、セリフや動きを足したり省いたりして、ストーリーを作り上げていく。 (表現力) ・演じていく中で、イメージのずれや演じ方でトラブルが起こることもある。そんなときは、その場で劇を中断して当事者やクラスのみんなの意見を聞きつつ、保育者は今何が困ったことなのかを子どもたちからの意見を取り上げみんなに問いかけ、当事者が、友達の意見を聞きながら解決していけるように援助する。 (問題解決能力) ・自分たちが活動していて楽しい(自己充実感)ということからさらに発展して、演じて見せる楽しさを意識できるように他のクラスとのかかわりを持つ。 (表現力) ・お客さんから、「もっとこうしたらよいと思う」という意見を言ってもらい、そのことを受け止め、工夫しようとする。 (問題解決能力) (他者理解)
---	---

2 活動の実施 当日は、保護者や他のクラスの仲間に分たたちの劇を見せる。

3 活動の評価とこれからの課題

(1) 評価について

- ①自分の意見や思いをことばや態度で伝え、話し合いを進められるようにする。 (コミュニケーション能力)
 - ・クラス全体の話し合いの場で、一人一人が思いを表出できているかを保育者がよく見極め、交流的にみんなの意見を聴こうとする態度が必要であった。
- ②意見の対立などの問題も予想されるが、保育者や友達に助けられながら、自分たちで解決できるようにする。 (問題解決能力)
 - ・特に、役ごとの小グループの中では、自己主張しやすいこともあってか、意見が対立しやすかった。そして、対立した場合、お互いなかなか引かない場面も多く見られた。しかし、なるべく介入せずに見守っていくことにより、自分たちで解決していこうとする姿が見られた。今回の活動のみでは、子どもたちの成長はそこまで見られなかったと思う。こま

での経験の積み重ねが大きいと感じた。

- ③自分の意見のみを押し通そうとするのではなく、他人の意見にも耳を傾けることができるようにする。 (他者理解 共感性)

・クラス全体の話し合いの場面では、自分の意見を述べ、それに対しての他人からの意見にも耳を傾けようとする姿がみられた。周りの友だちも、本人が、どうしたらみんなの意見に耳を傾けられるのか、相手を理解して話し合おうとする姿がみられた。一方、小グループ内での話し合いについては、スムーズに進んでいるように見えても、自分の意見を通そうとして、他人の気持ちや意見に気付いても受け止めず、他人の話の流れを流してしまおうとする子どもの姿も見られた。その場合、保育者がグループの話し合いを援助したり、そのグループ内で話し合った内容を、意図的にクラス全体の話し合いの場で取り上げる必要があった。

- ④自分勝手に行動するのではなく、クラスの仲間と協力しながら進められるようにする。 (協調性 規範意識)

・役ごとに、イメージを出し合って大道具を作ったりしていく中では、物を介していることで、話し合いがしやすかった。

- ⑤グループの仲間やクラスの前で自分の意見を話したり、アイデアを絵で表したりできるようにする。

・保育者の援助を受け、自分の思いをやっと表出できる子どももいた。話し合いの場面での配慮はもちろん、場合によっては、事前の保育者の援助の重要性を再確認した。 (表現力)

(2) これからの課題と指導について

・クラス集団の中で、1つの目標に向かって考え、話し合い、行動し、時にはぶつかり合うこともあったが、それは、マイナスの要因ではなく、子どもたちが、人間関係を構築していく上で大切な経験であった。今回の活動で、クラス全体として合意を形成していくことはできたが、いろいろな場面において、まだ、自己中心性が強かったり、コミュニケーションが取りにくかったりなどと、個人個人の課題もさらに良く見えた。今後は、ドッジボールなど、お互いが力を合わせるにより楽しくなるような、ルールのある遊びなどを通して、一人一人の個性を大切にしつつ、人とかかわる力の育成を図りたい。

(3) 保護者との具体的な連携の在り方

- ①子どもたちの日々の姿を、保護者に電話や面談などによりまめに知らせる。そのことにより、保護者が子どもの育ちをとらえることができる。
- ②保育の考えや年齢・時期による育ちの過程を、学年便りやクラス便りなどにより保護者に伝える。
- ③園長やフリー保育者より、子育てに関する情報や園の教育方針などを子どもの実際の姿を通して便りで知らせる。
- ④定期的に行う家庭訪問・個人面談のほか、必要に応じて保護者と面談を行い、子どもの実際の姿を伝え、課題を明らかにしていく。
- ⑤行事の前には、手紙で必ず趣旨説明をする。また、運動会など子どもたちの成長の大きな節目となる行事の前には、手紙での趣旨説明に加えて懇談会を行い、その行事がどのような意味を持ち、子どもたちが育つ過程の中でどのように位置づけられているのか伝える。その中では、エピソードを交えて、課題に向かっていく子どもたちの姿を伝えていく。そうすることで、行事当日、保護者が趣旨を理解しながら、見たり参加することができる。
- ⑥クラス親睦会（親子または保護者のみ）を行い、担任またはフリー保育者が参加する。保護者同士が仲良くなることで、子どもたちのけんかなどに対してもプラスの方向で解決できると考える。
※以上のような保護者との連携は、行事の前のみでなく年間を通して行うことが必要である。

4 年間を通した指導・援助の在り方

(1) 関連を持たせて指導することができる教育活動及び指導上の工夫・留意点

5歳児における年間の指導計画

活 動 内 容	「人間関係づくり」のための指導上の工夫・留意点
フルーツバスケット、 いす取りゲームなど 【4、5月】	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスのいろいろな友達とかかわるきっかけ作りとして設定する。 (他者理解 共感性)
へびおに・爆弾ゲームな ど 【5、6月】	<ul style="list-style-type: none"> ・簡単なルールのある遊びを通して、ルールを守って遊ぶ楽しさを経験させる。 (規範意識 協調性)
夏祭り、お泊り会の相 談 【7月】	<ul style="list-style-type: none"> ・クラス全員でひとつの目的を持って話し合う。子供同士で話し合いを進めていくには、まだ難しい時期である。保育者が、できるだけ多くの子どもたちの意見を聞き、どの意見も認める。そのことにより、みんなの前で自分の思いや考えを伝えることに自信がもてるようになる (表現力)。まだ話し合いの初期段階なので、子どもが発言したことを、保育者がみんなに分かりやすいような言葉で噛み砕いてゆっくりと伝え直す。そして、保育者は、持ち寄った意見を合わせて、ひとつの方向性を決めていく。 ・自分が伝えたいことをすぐ発言しようとする子どもの姿も予測されるが、友達が発言している時はそれを聞けるよう伝えていく。 (規範意識) ・この時期は、保育者がみんなの意見を上手く調整してひとつの方向性を出していくが、学年末の到達目標である“みんなで話し合い一つの方向性を出していく”(合意の形成)ためには、このような話し合いの経験を積み重ねることが重要である。
運動会に向けての活動 (リレー、タイヤ取り、 組体操など) 【9、10月】	<ul style="list-style-type: none"> ・種目は、子どもたちとの話し合いで決めるが、保育者はお互いが力を合わせて行う種目を取り入れていくよう、意図的にかかわる。 ・お互いの特性を生かし、協力し合って活動できるよう、友達の良いところに気づけるよう援助する。 (他者理解) ・団体競技において、共に喜び、共に残念に思う経験をする。 (共感性) ・団体競技で負けた時、友達を責めることなくお互い支えあい、次回への作戦を立てるなどして、前向きに活動できるように援助する。 (協調性) ・勝った時、嬉しいのはもちろんであるが、相手の気持ちにも気づかせる。 (規範意識 他者理解) ・1つの目標に向かってお互い協力しながら活動していく経験を積む。 ・トラブルは望ましい人間関係を構築する上で重要なので、流してしまったり、保育者が審判を下し解決したりするような手段は取らず、子どもたちが、自ら考えて答えを出していけるよう援助する。 (問題解決能力)
グループ活動 (給食当番、動物当番) 【10月～12月】	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びの部分では、自分がやりたいことを工夫して行うことが大切であり、生活の中では、自分で責任を持って行うという経験も大切である。 (規範意識) ・自己主張の強い子どもに対し、周りの子どもたちが自分の気持ちを伝えられなかったり、自己中心性の強い子どもがグループの子どもに意見を言われても自分の都合ばかりで行動し、そのことを受け止められなかったりすることも予測される。保育者が解決してしまうのではなく、間に入り、お互いの意見を聞きつつ、子どもたちが自ら解決していけるような援助をする。 (規範意識 コミュニケーション能力 問題解決能力)

<p>(遠足でのグループ活動)</p> <p>(いも料理)</p> <p>(クリスマス会での余興)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事の分担で、グループのみんなが納得できるよう援助する。 ・自分勝手な行動はグループのみんなに心配をかけたり、困らせたりすることに気づかせる。 (協調性) ・友だちと協力し合って行動する楽しさを感じてほしい。 ・何を作るか、グループの仲間と考える。その中で、自分の思い通りに進めようとする姿や、人に従うだけの姿が予想される。意見を言ったり、他人の意見を受け止めたりする経験が徐々にできるよう、保育者は、それぞれのグループや一人一人の現状、課題を正しく踏まえてかかわる必要がある。 (コミュニケーション能力) ・少人数でかかわることにより、お互い友達の得意なことや、内面性を理解しやすい。 (他者理解) ・大人数の中では、積極的に発言できない子どもも、小グループの中でコミュニケーションを図り、自信を付け、自分の存在の大切さを感じてほしい。 (コミュニケーション能力) ・グループの仲間と、アイディアを出し合ったり、力を合わせたりしてひとつの目的に向かって行動する経験を大切にしたい。 (協調性)
<p>ルールのある遊び (どろぼうと警察) 【11月】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分勝手に行動しては、友達と楽しく遊べないという経験をする。また、自己中心性の高い子どもの言いなりになってばかりいたら遊びが楽しくないという経験もする。 (規範意識 協調性) ・お互いの話し合いの上で言語表現しながら、ルールの確認をしていく。みんなが共通理解しているか確認する。 (規範意識) ・友だちと一緒に楽しく遊ぶためには、ルールを守る必要があるということ、遊びを通して感じるができるようにする。 (規範意識)
<p>劇づくりに向けての活動 【1月・2月】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の活動で、クラス全体として合意を形成していくことはできたが、いろいろな場面において、まだ、自己中心性が強かったり、コミュニケーションが取りにくかったりなどと、個人個人の課題もさらに良く見えた。今後は、ドッジボールなど、お互いが力を合わせるることにより楽しくなるような、ルールのある遊びなどを通して、一人一人の個性を大切にしつつ、人とかかわる力の育成を図る。
<p>ルールのある遊び ドッチボール 【2月・3月】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・“劇”活動を終えて、明らかに乗り越えなくてはならない課題がまだ見られる子どもについては、保育者がドッチボールなど、大人数で行う活動と一緒にやる。そこで、周りの子どもの反応を見つつ援助する。この時期になると、周りの子どもたちも成長し、公正な目で物事を判断したり、自分の考えを発言したりできるようになってくる。保育者は、子どもたちが発言したときに見守り、時には支えたりすることにより、子どもたち自身が自ら考えて、行動していけるよう援助したい。 (問題解決能力) ・自己中心性の強い子どもも、友達との楽しい遊びの中で自分勝手ではつまらなくなってしまうということを感じ、折り合いをなすということを感じさせたい。 (協調性) ・この時期になると大人数で遊ぶ楽しさも十分感じるようになってくる(大人数の共感性)。また、自分たちで遊びを進めて行けるようになり、その取り組み方も自律的になる。この活動を通して、友達同士がお互い自律的・自立的な関係を作っていきたい。

(2) 保護者・地域との連携の視点と具体的な支援

保護者とのかかわりは前述と同様で、それに加え以下のような地域とのかかわりが有効に働いている。

- ①サークル活動（育児サークル・陶芸サークル・絵本の読み聞かせなど）を通して保護者同士、地域の方、保護者OBと交流できるので、保護者が、子育ての悩みを保育者以外からもアドバイスを受けることができる。そのことにより、子ども理解が深まり、子どもたちのトラブルに対して温かく見守ることができたり、行事の趣旨の理解が深まったりする。子どもたちの成長の過程で、保護者の理解度は大きく影響する。
- ②地域NPO団体との協同によるビオトープ作りや観察に小・中学生も参加する。年齢や職業の違ういろいろな方々と触れ合うことは、物事の感じ方、表現の仕方などの違いを経験することができることから、人とのかかわりの上でとても大切である。
- ③地域の施設との交流活動を通して、いろいろな方々とかかわることにより、言葉だけで相手をいたわるのではなく、お互い知り合うことで相手の気持ちに気づき、相手を思いやるということに結びついていく。それが、園生活の中での友達関係にもよい影響を与えてくれる。
- ④小学校の生活科の授業に園児が招待されたり、小学生が生活科の授業で幼稚園を訪問したりすることにより、小学生になる期待が園児に膨らむことはもちろん、自分たちよりも少し大きな子どもたちとのかかわりは、大きな刺激となる。また、小学校の授業参観に保育者が参加したり、小学校教諭との連絡会議に参加したりすることにより、小学生になった卒園児の状況や園での生活がどのように生きているか把握したり、生かしてもらえるよう連携を図ることができる。
- ⑤中学生のマイチャレンジ、高校生のインターンシップ、高校生の家庭科の授業での幼稚園訪問などを通して、異年齢の人とのかかわりが持てる。

5 効果的な指導を行うための課題

- (1) 1つの活動で人間関係が構築されていくわけではなく、さまざまな活動を通した日々の経験の積み重ねから人間関係を構築する力が養われていく。すなわち、行事のみにとらわれるのではなく、日々の生活の中で、人間関係に視点をおいたとらえ方が重要である。
- (2) いつも同じ人間関係ばかりでなく、違う仲間と新たな関係を作っていくことは容易ではないが、人とのかかわりを学んでいく上では重要であると考えられる。いつもの安定した関係のみで園生活が過ぎてしまうのではなく、保育者が意図的に仲間関係に揺さぶりをかけ、時には違う子どもとのかかわりや大きな集団の中でのかかわりを持たせることが必要である。
- (3) 一人一人の子どもの成長過程や発達課題を、担任だけの見方だけではなく、学年の保護者、フリー保育者などとの話し合いを通して明らかにしていく。時には、それぞれの立場によって課題のとらえ方が異なることもある。そのような場合は、子どもの姿と教育課程を照らし合わせながら成長過程を確認し、職員間で共通認識をしていく。その上で、担任とフリー保育者それぞれの連携をしっかりと図り援助することにより、子どもたちの大きな成長が望める。
- (4) 5歳児は、幼稚園生活最終学年であるが、今後、小・中学校へと続いていく。幼稚園生活で目標を達成したから終わりではなく、成長した子どもたちが、さらに効果的に伸びたり、これから課題を乗り越えていったりするためにも、小学校との連携は非常に重要である。



劇で着る衣装作りを同じ役の仲間と・・・

縦割り班活動を活用した人間関係づくりのための指導・援助の在り方 ー運動会を中心とした異年齢集団の人間関係づくりー

1 テーマ設定の趣旨等

(1) 学校規模等

① 児童数117人、学級数 6

② 本校は農村地区にあり、動植物の自然の姿をいたるところで見ることができる緑豊かな環境に恵まれている。学校を取り巻く地域の雰囲気も牧歌的である。

(2) 児童生徒の人間関係に関する実態や課題

① 児童は概して純朴である。また、明るく健康的で活発に行動できる。大家族で育った児童が多いためか、おおらかで人なつこい部分がある反面、初めて会った人などの対しては、引っ込み思案的な傾向も見られる。

② 田園地帯が多いといいながらも、児童が手軽に遊べる公園等も少なく、休日や長期の休業などに多くの子が一緒にまとまって遊ぶ場面は少ない。また、田園地帯であるがために、隣の家が離れているという実情から、他児童の家へ遊びに行きコミュニケーションを図ることが困難な児童もいる。

③ 学校の規模が小さく、同じ学級や同じメンバーで6年間を過ごすことが多いため、学級の中の友人関係などが固定化してしまうところが見られる。

(3) テーマ設定の理由

① 学校での休み時間や放課後、また、休みの日の遊びの様子を見ていると、同じ学年の児童同士で遊んでいる姿がよく目に映り、異なる年齢の児童と遊ぶことが少ない。学校でのつながりがそのまま人間関係として反映していると考えられる。そのために、よく遊ぶ人とはお互いの人間関係を保つことができるのだが、狭い範囲での人間関係に陥りやすい。そこで、他人を思いやる心や、たくさんの人と交わりより多くの生活体験を学ぶことができるように、異なる年齢集団の縦割り班を組織し、より多くの児童との、幅広くしっかりした人間関係を築かせたい。

② 単に縦割り班を組織するだけでなく、それを中心とした活動を学校行事や児童集会などの特別活動、また清掃活動や業間活動などの中に位置づけ、継続・発展させていくことで、異年齢集団による望ましい人間関係づくりを学ぶ良い機会にしたい。

③ 縦割り班活動の集大成的な意味合いをもつ運動会の行事を中心に置き、テーマに迫れるようにした。また、学校での活動を一層効果的なものにするため、地域との連携を深めながら、活動の場を広げるようにしていきたい。

(4) 目標

① 決まりやルールの大切さを理解させる。(規範意識)

② 他の人の良いところを認め合い、ともに理解を深め合う気持ちを育てる。(他者理解 共感性)

③ 相手の立場を考えながら、自分の考えを伝える能力を育てる。(コミュニケーション能力)

2 取組の方針

(1) 年度当初の段階では、各学年の発達段階に応じ、学級を中心とした仲間づくりを進める活動を展開する。

(2) 学校行事や児童会の集会活動、また清掃活動、業間の縦割り班遊びなどを年間を通じた計画の中に位置づける。縦割り班編成後の各活動に入る前には、児童それぞれがどんな役割を持って活動するのか、またどんなことができるのかを話し合わせる。その過程で、児童それぞれがお互いに協力しあって活動できるように、めあてをしっかりとらせるような指導を行う。

(3) 縦割り班活動の目的やその活動の内容について話し合ったり、成果について保護者や地域に向けて発信したりして、学校の取組について理解を深めるとともに、児童が学校で人間関係を築いた

り、学んだりしたことを、地域にもどっても生かされるようにする。

3 運動会における縦割り班活動の指導内容

(1) 概要

①該当学年 全学年児童

②運動会では、年度の初めに編成した縦割り班を中心にした赤白の組み分けを行う。赤対白の対抗や縦割り班で競うなど、異年齢集団で活動することにより、人間関係づくりに幅をもたせるようにする。運動会の練習に入る前の業間の時間や昼休みなどに、縦割り班で集まって種目についての作戦を話し合ったり、役割を決めたりしながら、自分たちから進んで練習に取り組むことができるように指導・援助していく。

(2) 指導計画

活 動 内 容	「人間関係づくり」のための指導上の工夫・留意点等
<p>1 事前における活動 縦割り班の編成(4月)</p> <p>縦割り班での活動 (1年間)</p> <p>【運動会】 種目決め (9月)</p> <p>・運動会で行う縦割り班の対抗種目を話し合いで決める。</p>	<p>・6年生児童を中心とした組織を編成する。</p> <p>・内容については、P21「4年間を通した指導・援助の在り方」に記述。</p> <p>・異なる年齢が集団としてまとまる過程の中では、自分勝手な行動を取る下級生児童や、下級生に対して横柄な態度を取る上級生児童も見られる。上級生児童が下級生児童を思いやったり、面倒をしっかりと見たりすること、また、下級生児童が上級生児童から多くの生活体験を学んだり、上級生に従ったりすることを目的としながら、教師もねばり強く指導をしていく。 (他者理解、協調性、規範意識)</p> <p>・上の学年と下の学年の結びつきが弱いとか、建設的な方向へ話し合いが進まないなどの問題が出た場合、人間関係の結びつきをより強められるよう、年間を通した系統的な縦割り班活動を考慮した上で改善を図っていく。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center;">こんなときどうするか1</p> <p style="text-align: center;">児童同士でコミュニケーションを図らせる時間が、授業中の活動時間以外なかなかとれない。</p> <p>集団を建設的な方向にもっていくためには、児童同士の交流を深め、いろいろな側面から他人を理解する必要があります。しかしながら、現実には授業を進めるための時間に多くを費やされ、そういった活動に時間を割く余裕がないのが実情です。そこで、次のような活動を取り入れて交流を図ってみてはどうでしょうか。</p> <p>昼休みに集団(学級や縦割り班)でレクリエーションをする。 特別活動の時間や業間時間を活用して共同作業を行う(農園づくり、植樹作業など)。</p> </div> <p>・児童会の代表委員会の場で運動会で行う種目を選定する。全体を考えないで、「楽しい」とか「おもしろい」という考えで意見を出す児童も見られるので、縦割り班で協力して行うことができるような内容になるよう、方向性をしっかり決めて話し合いに参加できるようにさせる。</p>

<p>めあてづくり (9月)</p> <ul style="list-style-type: none"> 児童一人一人の取り組みめあてを設定させる。 <p>役割分担 (9月)</p> <ul style="list-style-type: none"> 縦割り班ごとの話し合いで、児童それぞれが班の中で役割を分担できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 話し合いでは、上級生児童は自分の考えを下級生児童に分かりやすく伝えるとともに下級生児童は上級生児童に自分たちの考えをしっかりと発表できるような意見交換が十分なされるように教師が援助する。 (表現力) 学級の時間などを使って運動会に対してのめあてを設定させ、行事に対しての目的意識を一人一人の児童にしっかりとらせるようにする。 業間の時間や昼休みなどを利用してしながら、縦割り班での対抗種目について各班ごとに内容を確認し合い、それぞれの学年児童がどのような役割を分担していくのか話し合いをしていく。 話し合いでは6年児童がリーダーシップをとり、中心となって進めていけるように援助していく。
<p>2 活動の実施</p> <p>縦割り班での練習</p> <ul style="list-style-type: none"> 縦割り班対抗の種目練習を行う。 <p>組対抗種目の全体練習</p> <ul style="list-style-type: none"> 組対抗種目の練習を行う。 <p>運動会全体練習</p> <ul style="list-style-type: none"> 運動会全体の練習を全校で行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 業間の時間や昼休みなどを使って練習を行う。練習においては、最初から上手にできなかったり、また、集団の中に規制されることで思うように行動できずに自分勝手な行動をとってしまったりする児童が見られる。そういった場合でも、性急に結果を求めすぎずに、みんなと一緒に活動する楽しさや、集団の中でのルールや協調性についてねばり強く話をしながら、良くできた時は多めに褒めて、その良さが継続してできるよう指導していく。 (適応力) 種目練習では、班長となる6年生が下級生をリードしながら行うことになるが、全ての6年生がそういう力に長けているわけではないので、負担を感じる児童も出てきてしまった。サポート体制や5年児童の協力などを視野に入れた練習ができるようにすると良かった。 同じ組(赤組、白組)になった縦割り班の上級生児童が集まり、同じチームとして赤白対抗種目の作戦をたてたり、応援の仕方などを話し合ったりしながら、下級生のリードの仕方などについて話し合う。縦割り班とはまた違った大きい集団になることで、他の人に仕事を任せてしまったり、適当にやり過ぎしてしまったりする児童も見られるが、良くやっている児童を褒めたり、協力してやっているグループの良さを児童に分かるように取り上げたりしながら、連帯感をもって取り組むことの良さを理解させる。 (協調性) 勝敗の関係する種目では、練習の段階で勝ち負けにこだわりすぎて協調性のとれない行動をとってしまう児童が見られる。そういった児童には、自分のたてためあてを確認させるとともに、「自分が勝者になったときに敗者の態度が潔くなかったら？」などと具体的な話をしながら、勝敗に対して正しい行動がとれるよう指導を継続していく。 (規範意識) 開会式の入場や閉会式の隊形などでも、縦割り班中心の動きを取り入れ、運動会の行事全体と縦割り班との絡み合いが、より深まるようにしていく。上級生児童に、行事を動かす原動力が自分たちであり、より積極的に行事に取り組もうとする意識をもたせるようにする。 (自己有用感)

運動会当日	<ul style="list-style-type: none"> ・種目練習をしていく中で、強い班に勝ちが集中してしまい「どうしても○組、○班には勝てない」という気持ちが勝てない班にはでてきてしまった。勝敗が最後まで分からないような緊張感のある種目選びも、行事に夢中になって取り組むためには大切な要素でもある。 ・教師は、形式や出来映えばかりにとらわれずに、一人一人の児童がどれだけ真剣に取り組んでいるのか、また縦割り班の中で上級生・下級生がまとまり、よい人間関係がつけられているかをよく観察し、よくできた行動に対し、賞賛の言葉を投げかけるよう心がける。
運動会后	<ul style="list-style-type: none"> ・運動会前にたてためあてについて、児童に自己評価を行わせる。また、縦割り班で集まり、練習や運動会当日の活動について班のメンバー一人一人が、自分の活動を振り返りながら発表することで、次の活動へとつなげていくようにする。 (表現力)

3 活動の評価とこれからの課題

(1) 評価について

①決まりやルールの大切さを理解させる。

・多くの児童は、ルールの上に成り立って集団行動がまとまることが理解できた。しかし、一部には勝敗にこだわりすぎるあまり、自分勝手な行動を取る児童も見られた。

②他の人の良いところを認め合い、ともに理解を深め合う気持ちを育てる。

・練習当初は、上級生児童が自分たちについてこない下級生児童についてあまり関心を示さなかった。しかし、集団としてまとまることの大切さや練習の仕方などについて丁寧に指導した結果、上級生が下級生の目線に立って考えることができるようになった。また、下級生も上級生の言うことを素直に聞き入れ、きちんと行動できるようになった。

③相手の立場を考えながら、自分の考えを伝える能力を育てる。

・話し合いを重ねるごとに、自分の考えや思いを伝えることができるようになってきたが、理由を付けて話すことに関しては十分ではなかった。

(2) これからの課題と指導について

○6年生をリーダーとした縦割り班中心の諸行事を展開することで、6年生児童の責任感や自己有用感を高めたい。また、6年生をサポートする5年生児童にも、上級生として活動に当たることができるように力をつけさせる。上級生が自覚と自信をもって学校生活を送る姿が、下級生には上級生に対する信頼感を生み、また「自分もあのようにになりたい」という憧れを抱かせることにもつながる。そのように、生徒間の温かい人間関係を基盤とする一体感を育てていく。

○下級生児童には、これまで縦割り班活動にかかわったことや活動を通して学んだことを生かしながら、次へとつなげていくことが重要になってくる。下級生児童も、学級やグループの中で役割意識と責任感を持って行動することができるように、発達段階に応じた課題を明確にし、その達成のための活動を計画的に取り入れていく。

(3) 保護者との具体的な連携の在り方

①縦割り班の活動を、広報誌などを通し保護者にお知らせするとともに、PTA理事会などの保護者が参加する会議の中で話題を出し、その意義や実践している内容などについて理解していただく。また、学校で行っている活動を広げるためにも家庭にお願いしたいことを伝える。

②保護者と児童が共に行う種目の中に、縦割り班をつくっての対抗種目をもうけ、どのようにまとめて活動するのかを実際に協議しながら理解していただく。

③運動会終了後のPTA広報誌などで、学校での活動について広くお知らせする。また、運動会全体を撮ったスナップ写真を集め、4月の段階から縦割り班などで活動している写真と併せて学校廊下に掲示し、保護者が来校した時などに参観していただく。

④保護者に対して行う学校評価の中で、学校として行っている縦割り班活動についての意見を伺い、次年度への改善を図っていく。

4 年間を通じた指導・援助の在り方

(1) 関連を持たせて指導することができる教育活動及び指導上の工夫・留意点

活 動 内 容	「人間関係づくり」のための指導上の工夫・留意点
<p>1年生を迎える会 (4月) 【特別活動】 学校に入ってきた新入生を温かく迎える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 縦割り班を実質的に編成する最初の活動になる。上級生としても自分の班の児童との初顔合わせなので、温かい気持ちで接することができるように学級で事前指導を十分行う。 (共感性) 活動後には各班で活動の評価を行い、次の集会での活動に生かすことができるようにする。
<p>縦割り班による清掃活動 (5月～3月) 縦割り班による清掃活動を通して学年の枠を越え、お互いに協力し合う態度と連帯意識を高める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 児童会活動や行事などとは違った縦割り班を組織することで、上級生と下級生とがたくさんの人たちと知り合い、学び合うことで人間関係の幅を広げるようにする。 上級生児童が、リーダーとしての意識を持ち率先して取り組むだけでなく、下級生児童がどんなことができ、どんなことができないのかわかり、それを手助けできるように他者理解を深めさせる。そして、自分より小さい存在への心配りができるような指導を十分に行う。 (他者理解) 下級生児童は、上級生に倣って仕事ができるように、学級での指導を十分行う。
<p>業間活動を利用した縦割り班遊び (6月) 縦割り班での運動遊びを通して、異学年間での交流を深め、仲良く運動することができるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> これまでの集会や清掃などの活動で学んだことをもとにさせながら、児童同士が自分たちで自発的にルールを作り遊ぶことができるように発展させる。そのことを通してさらによりよい人間関係づくりができるように援助する。 低学年児童は、言葉が未発達なので、遊びの中で様々な行動や態度を取って自分を表現してくる。お互いが班のメンバーの一人一人を多面的にとらえることができるよい機会として指導する。 (表現力)
<p>レクリエーション集会 (6月) 【特別活動】 集会を通して異学年交流を深めるとともに、縦割り班での活動に達成感が得られるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> これまでの縦割り班を通じた活動をさらに拡充し、班員の協調性を深められるような集会を計画し、実施する。 校内オリエンテーリングを実施したが、活動範囲を広くとったことで、児童の中には自分勝手な行動を取ろうとする児童も見られた。上級生が下級生を掌握するには難しいところもあるので、縦割り班に教師がつきそい、集団で行動するときの決まりなどを確認させながら指導していく。

	また上級生児童には、相手の状況や気持ちを考えて行動がとれたことなどを賞賛していく。 (協調性)
運動会 (10月) 【特別活動】	○これからの課題と指導 ・6年生をリーダーとした縦割り班中心の諸行事を展開することで、6年生児童の責任感や自己有用感を高める。また、6年生をサポートする5年生児童にも、上級生として活動に当たることができるように力をつけさせる。更に、上級生と下級生との温かい人間関係を基盤とする一体感を育てていく。 ・下級生児童に対しても、学級やグループの中で役割意識と責任感を持って行動することができるように、発達段階に応じた課題を明確にし、その達成のための活動を計画的に取り入れていく。
業間活動を利用した兄弟学級遊び (11月) 上下の学年で仲良く遊び、縦の人間関係を深める。	・1年から6年までの学年を兄弟学年として組み合わせる。これまで学んだことを生かしながら一緒に遊び、その中で年上となる学年児童が下級生の面倒を見ることができるようにする。この活動を通して、6年生以外の上になる学年児童にも上級生としての意識をもたせ、班長となる6年生をサポートしていく気持ちを育てる。 (共感性)
グループ学習発表会 (坂小フェスタ-12月) 【特別活動】	・学級ごとのグループ学習発表会を行う。1年から4年児童においては、発表本番に向けたグループ学習の中で、児童一人一人に様々な役割を経験させ、メンバーと良い人間関係を築きながら活動しようとする気持ちを育てる。
6年生を送る会 (3月)【特別活動】 今まで清掃班や縦割り班など様々な面でお世話になった6年生に対してその素晴らしさを理解し、感謝の気持ちを持ち、卒業を祝うために協力して取り組もうとする態度を育てる。	・ここまで班長や副班長として縦割り班をまとめてきた6年生に、感謝の気持ちをもって行動することができるようにさせる。そのためにも、事前に活動の目的や個々の児童のねらいをはっきりさせてから活動に入るように心がける。 ・縦割り班活動が次年度にも引き継がれるように、6年生から5年生への橋渡しをしっかりと行い、新たに縦割り班のリーダーとして活動していこうとする意欲を5年生にもたせるようにする。

(2) 保護者・地域との連携の視点と具体的な支援

- ①児童が望ましい人間関係を構築できるようにするためには、児童同士の関係だけでなく、学校と保護者、また地域との連携が重要になってくる。そのためにも、学校が保護者や地域を、また保護者や地域が学校のことを理解し合い、共同歩調をとることの意味は大きい。そのために、PTA理事会などでは、児童の様子や学校で進めている活動の方針などを具体的に話題として取り上げ、保護者への理解を深めていく。
- ②日常の学校で進めている活動や行事について、また学校での児童の様子などについて、保護者や地域の方によく理解していただくために、実践していることを学校だよりや学年・学級だよりの中で具体的に掲載し、学校の活動への理解と協力をお願いする。さらに、学年部会の中では、保護者に異学年児童とふれあうことで社会性の伸長が見られることなどに言及しながら、

家庭にかえってからも学校の活動が広がるように協力をお願いする。

- ③保護者と学校のみならず、保護者同士の連携やコミュニケーションを深めるためにPTAが共同してできる球技・造形・料理などの催しを実施し、よりよい人間関係づくりができるように積極的に推し進めていく。

5 効果的な指導を行うための課題

- (1)活動に入る前の心構えや、自分または班のめあてをしっかりとてさせ、それを認識させることで活動がよりスムーズになり、児童がお互いのことを認め合う場面が多くなっていく。また、活動の後、児童自身に自己評価をさせることが、次の活動への意欲となって行動にも表れてくる。そうした事前・事後の指導の充実を図ることが大切になってくる。
- (2)縦割り班を通しての活動で人間関係を深めさせるためには、各活動でのねらいをはっきりさせることと、教師の連続的かつ系統性を考えた指導・援助が重要である。

こんなときどうするか2

ひとつの行事（活動）を通して、一人一人の人間関係が深まり、まとまりが出てきた。この雰囲気をもっと維持していきたい。

大きな行事や活動に対し、児童が目的をしっかりと把握しているとき、学級や縦割り班などの集団は非常にまとまりやすく、集団の機能が成立します。しかし、そのままにしておくと自己中心的な小グループが発生し、集団を混乱させることもあります。こういうときこそ、活動が停滞しないように、集団として活動する経験を積み重ねていくことが大切です。授業や学級活動の中であれば、グループでできる活動を取り入れてみたり、係での活動を推進したりするのも良いです。また、学級全体として取り組むべき活動を見つけ、それに対し学級や個人としてのめあてをもたせて、計画的に活動に当たらせてみるのも良いでしょう。

集団で活動に当たらせるには、自分たちでできるという達成感を一層強く持つことができるようにすることも大切です。一つの活動や課題を達成したあとに、新たな課題を自分たちで見つけ出し、活動の幅を広げていけるようにするためにも、教師はリーダーシップをとっている児童をさりげなく援助し、集団のまとまりや活動が進展するように支えながら、集団の動きを活性化するような対応をする必要があります。



縦割り班活動ごとに運動会の種目や役割分担について話し合っている場面

修学旅行を活用した人間関係づくりのための指導・援助の在り方

1 テーマ設定の趣旨等

(1) 学校規模等

①児童数130人、各学年1クラス

②市の中心部から10kmほど離れ東西を山にかこまれ中央に川の流れる自然豊かな地域。三世代同居も多く、保護者を含めた地域住民の学校教育に対する関心も高い。地域にある学校農園を活用しての農業体験活動も盛んである。

(2) 児童生徒の人間関係に関する実態や課題

①小規模校故に、学年内はもちろんのこと他の学年の児童のことも知っていて、気軽に話したり遊ぶなどの交流は多い。縦割り班活動が活発に行える要因にもなっている。

②クラス替えが無く、転出入も少ないことから、同じ環境で過ごしてきた時間が長いために、人間関係の硬直化やお互いを固定観念で見えてしまい、否定的な見方をしている様子もある。

③お互いの性格や行動を知っているという思いから、多少の問題行動に対しては寛容になりすぎ、注意をする様子が見られない。

(3) テーマ設定の理由

①11月に実施される修学旅行は、6年生にとっては一大行事であり、だれもが心待ちにしているものでもある。前向きな気持ちで臨む活動では、課題を解決するエネルギーも高い。

②修学旅行を成功させるためには、事前の計画から終わってからのまとめなど、話し合いや協力していかなければならないことが多く、お互いを改めて見つめる絶好の機会である。

(4) 目標

①友人の良いところを新たに認められるようにする。(共感性)

②相手の気持ちを考えながら自分の思いを伝えることができるようにする。

(コミュニケーション能力)

③個人が身に付けてきた善悪の判断基準を集団の中でもお互いに高め合えるようする。

(適応力)

2 取組の方針

(1)年度当初は、グループの意図的編成と場面に応じた小集団作りによって、だれとでも行動できるような態度の育成を図る。

(2)旅行での自由行動の計画を立てながら、お互いの意見を尊重し合い納得のいく行動プランを立てるようにする。

(3)活動の中で生じた問題の解決の仕方について話を聞き、早い時期に解消する。

(4)旅行後には、解決できた問題とできなかった問題を話し合い、今後の生活に生かす。

(5)人間関係の深まりを話し合いなどの場で取り上げ、お互いの成長として意識させることで、これからの活動に反映できるようにする。

(6)家庭との連携を図るため、学級便りでグループ活動の様子や児童の声を知らせたり、協力を呼びかけたりする。

3 修学旅行の指導内容

(1) 概要

①第6学年

②11月上旬、鎌倉での班別自由行動、箱根芦の湖畔宿泊、1泊2日バス旅行

(2) 指導計画

活 動 内 容	「人間関係づくり」のための指導上の工夫・留意点等
<p>1 事前における活動</p> <p>めあての設定 (10月)</p> <ul style="list-style-type: none"> 修学旅行を終えたときにどんなクラス、自分になっていたか考え、全体を通してのめあてを決める。 <p>グループ編成 (10月)</p> <ul style="list-style-type: none"> グループ作りの方法について希望を出し合い話し合う。 <p>約束作り (10月)</p> <ul style="list-style-type: none"> 旅行中の細かい約束を決める。 <p>研究テーマ・行動計画 (10月)</p> <ul style="list-style-type: none"> テーマに関わる見学場所の設定や事前研究をする。 教科に関する学習(理科:大地のつくり、社会:鎌倉時代)や総合的な学習のテーマ(人)をもとにグループ活動の中で解決していく課題を決める。 <p>バスレク準備 (10・11月)</p> <ul style="list-style-type: none"> グループごとにみんなが楽しめるレクリエーションを準備する。 	<p>「人間関係づくり」のための指導上の工夫・留意点等</p> <ul style="list-style-type: none"> クラス目標と対比させながら、個人の長所をうまく出せるようなものを考えさせる。 活動のめあてを明確にすることで、修学旅行に関する物事を考えるときのよりどころができ、目的のはっきりした活動となる。 児童の思いを聞き、誰もが納得のいくグループにする。 男女別や好きな友達同士という意見も予想されるが、めあての達成のために一番良いグループにするよう助言する。(協調性) 自分たちの約束を作る参考に、昨年実施した海浜自然の家宿泊学習の反省を示す。(規範意識) 約束に対して意見が割れるときには、理由をはっきりさせて考えを述べるように助言する。(コミュニケーション能力) グループの一人一人が修学旅行に対して抱く思いを発表し合い、課題解決に向けて意欲のもてる内容を決められるようにする。(課題解決能力) 行動計画を立てるときに、行きたい場所を班長にまかせてしまったり、逆に、自分の考えを譲らない児童がいる。話し合いで解決することが大切なので、修学旅行の目的をしっかりを認識させ、調整するよう助言する。しかし、一人一人の思いを満足させることは難しいので、「行きたい場所別のグループ」を編成することも必要な場合がある。(コミュニケーション能力) 準備に協力的でない児童がいたときに、友人からの注意の仕方によっては、よけいに反発して非協力的になっていくことがある。一方、注意をしないと、準備する児童としない児童に分かれてしまう。注意の仕方を考えさせるとともに、協力して準備することの意味を考えさせる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p style="text-align: center;">こんなときどうするか1</p> <p>友達の欠点ばかり指摘して、逆に反感を買ってしまう生徒がいる。</p> <p>このような児童生徒は正義感が強すぎる場合があります</p> </div>

	<p>す。また、自分にとって不都合になることを指摘する場合もあるため、内容に応じて対応を考える必要があります。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 言葉遣いを考えさせる。 <ul style="list-style-type: none"> ・注意や指摘をすることだけでは、お互いに気持ち良くないことを振り返らせる。 ・教え合うことを考えて、『きっと相手は、分からなかったから、忘れていたから、知らなかったから』という意識で言葉にしてみるようにさせる。 ・「こんなふうにしてみたらいいんじゃない」などと声かけの例を示す。 ・アサーティブスキル学習の実施により、言葉遣いによって伝えたいメッセージと相手が受け取る気持ちが異なってしまうことを体験させる。 (年間指導計画P29「もし、友達が約束を破ったら」参照) 2 注意の場面では、反感を持ちそうな相手児童に「注意してくれた友達がいて良かった」という気持ちをもたせる。 <ul style="list-style-type: none"> ・悪いことをそのままにしないで、注意してくれたのは本当の友達でしかできないことを話し、正しく導こうとしてくれたことに感謝できるようにする。 ・「声をかけてくれてありがとう」などと反応の例を示す。 3 コーチ役をさせる <ul style="list-style-type: none"> ・得意な面を取り出し、数人のリーダーの中の一人としてクラスの小集団の先生役をさせる。 ・自分の得意なことなので、余裕をもってみることができ話しかける言葉もやさしくなる。 ・教わった友達の感想を発表させ聞かせることで、自分のことばや行動で周りの友達の気持ちも変えられることに気付かせる。 ・「いいよ、その調子」などと友達同士褒め合ってみることも助言する。 <p>・互いの持つ特徴を生かして内容を考え、新しい面を見せたり、見ることができたりするようにしたい。(他者理解)</p> <p>・一部の児童ばかりが目立ち、楽しくない思いをする児童がでないよう、グループの全員が活動できるように分担することや、聞き手を参加させる場合の指名は、指されていない友達を優先させることも必要だと教える。(協調性)</p>
<p>2 活動の実施 バスレク</p> <p>・班ごとに準備してきたレクの発表をする。</p>	<p>・全員が順番に行うしりとりゲーム等を準備させ、必ず出番が来るようにした。</p> <p>・引率者も児童と同じ立場でゲームに参加し、誰でもルールを守ることで楽しい活動になることを伝える。(規範意識)</p>

<p>班別自由行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・予定より早く到着したために自由時間が長くなる。グループごとに話し合い、予定の変更をする。 <p>当日夜の反省会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループごとに集まり、一日を振り返る。 <p>博物館見学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループごとに自由に見学する。 <p>帰校後旅行のまとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ活動の様子をまとめた壁新聞と個人の思いをまとめたA4サイズ1枚の新聞を作る。 <p>活動の反省</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事前に決めた約束が守れたか反省を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・クイズでは、グループで相談して答える問題など、多くの友達に参加できるような工夫があった。 ・実際に行ってみると、昼食場所が開店していないなどの問題が起きたが、電話を使って引率者と児童が連絡を取りながら、予定の変更を確認できるようにする。 (問題解決能力) ・グループで協力した行動により、活動が時間より早く進められていることの素晴らしさを褒め、今後の活動の意欲付けをする。 (協調性) ・友達を非難する場面を見つけたら、状況を詳しく話すようにさせ、グループのみんなはその場でどのように話したのか、どのように言われたら行動を改められたのかなど、話し方を考えさせる。 (コミュニケーション能力) ・お互いのグループ活動の様子を発表する機会を食事の時やバスの中、班長会議などで取り入れ、交流を図り問題点を話し合い解決策を出し合う場とする。良い行動を認め合う時間を作る。 (他者理解) ・博物館内では特に、友達を怒らない、怒らせない、を考えた行動をするように注意してから班別行動を行わせる。 (協調性) ・一部の児童に頼り、まとめへのかかわりが少ない児童には、グループでの協力があってこそ楽しく過ごせたこと、本児もその1人で気持ちの良い行動をしていたことを思い起こさせ、最後まで自分の良さを忘れず活動にかかわることを期待していることを伝える。 (自己理解) ・修学旅行全体の反省を記述させながら約束が守れたのか反省させ、守れなかった自分を見つめたり、守れたことの気持ちよさを味わわせる。 (規範意識)
---	---

3 活動の評価とこれからの課題

(1) 評価について

①友人の良いところを新たに認められるようになった。

- ・リーダーシップをとって活動した班長の良さを記述するなど、班のメンバーやクラスの友達を具体例を挙げて認めていた。

②相手の気持ちを考えながら自分の思いを伝えることができるようになった。

- ・話し合いでなかなか意見が言えず、一部児童の考えで決まってしまう様子がみられた。

③個人が身に付けてきた善悪の判断基準を集団の中でもお互いに高め合えるようになった。

- ・自分たちで決めたままりをほぼ守ることができた。また、電車の利用でも周囲に気をつかった言動をしていた。ただ、守れない友達に対して注意することができていなかった。

(2) これからの課題と指導について

○お互いが自分の役割を自覚した行動はできていたが、思いをしっかりと伝えることができない児童もいるため、少人数での対話を増やしながらか、考えを言葉で表現できるよう指導する。

(3) 保護者との具体的な連携の在り方

- ① 修学旅行の目的（仲間づくりの場であること、規範意識を高め合い実践する場にすること）や内容を印刷物で知らせ、協力をお願いする。特に、前年の日光遠足や宿泊学習の反省を元に、正しい持ち物、小遣いの使い方、飲み物のとり方など呼びかける。
- ② 旅行先から家族に宛てた葉書と帰宅してすぐに書いた修学旅行日記を保護者にも読んでもらうことで様子を知らせたり、会話のきっかけにもする。
- ③ 修学旅行中の様子を冊子にしてまとめ、記録に残すと共に、活動の様子をクラス便りで知らせる。
- ④ 活動の前後による人間関係の変化など連絡を取り合う。

4 年間を通した指導・援助の在り方

(1) 関連を持たせて指導することができる教育活動及び指導上の工夫・留意点

活動内容	「人間関係づくり」のための指導上の工夫・留意点
グループ作り (随時)	・ 偶然性、児童の目的別、教師側の意図的な編成など、様々なメンバーによるグループ活動を適宜取り入れ、誰と一緒にでも活動が変わりなくできるように慣れさせる。 (協調性)
小さな親切の木 (教室掲示) (随時)	・ 友達が書いてくれた親切の内容を読み、自分では何気ない行いでも友達にとっては気持ちのよいことであったことに気づかせる。(自己理解 他者理解)
農園活動 (米作り、ショウガ栽培、蕎麦打ち体験など) (年間) 【総合的な学習の時間】	・ 地域の方とふれ合いながら、他の学習活動では見られない友達の良い面を認め合うように積極的な活動をしていた友達を活動後に発表し合う。(他者理解)
縦割り班清掃 (年間) 【教育課程外】	・ 2か月程度で場所を変え、班長となる機会を増やし、班員をまとめ仕事を指示するを経験し、クラスでの係活動や班活動に生かせるようにする。 ・ 班長同士の苦勞を語り合う場を作り、お互いの大変さを認め、共感し合う。
帰りの会 1日の反省 (年間) 【特別活動】 (Sスマイル、Tサンキュー、Eエクスキューズ、Pプリーズ)	・ 友達の良さ (笑顔、感謝、謝る、譲り合い)などを発表し合い、お互いの良さを見つけ、見つけられることの素晴らしさを味わわせる。 (自己理解 他者理解)
国語「学級討論会をしよう」(6月) 【教科指導】	・ 自分の主張を伝える技術や、相手の意図を分かろうとして聞く力を身に付けられるようにする。自分の意見を言

	うこと、友達の意見に対して自分の立場を答えることなど活動の場を保障する。
朝の会でのフリートーク (自分の抱える問題や疑問などをみんなに投げかけ、解決方法を出し合う) (6～12月)【特別活動】	<ul style="list-style-type: none"> ・問題を自分のこととしてとらえたり、第三者として冷静に分析して考えたり、思ったことを自由な雰囲気です話合う場とする。 ・友達の発表を聞く態度の向上を図るため、始まりと終わりの拍手を気持ちを込めて行わせる。 ・挙手している児童だけの話し合いにならないように、順番に指名して意見を言わせたり、グループでミニ話し合いを持たせたりする。 (コミュニケーション能力)
自分と友達 (自分について自己認識と他者認識の違いを知る) (7月) 【特別活動】	<ul style="list-style-type: none"> ・自分自身について書いた長所を読み合い、納得できることを話すだけでなく、本人は気付いていないことでの良い点を話すようにする。
国語「ガイドブックを作ろう」 (10月) 【教科指導】	<ul style="list-style-type: none"> ・協力して修学旅行のしおりが作れるように、文章の量を変えたり、分担する見学場所の内容を考慮したりして担当場所を与える。
修学旅行 (11月) 【特別活動】	<p>○これからの課題と指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お互いが自分の役割を自覚した行動はできていたが、思いをしっかりと伝えることができない児童もいるため少人数での対話を増やししながら、考えを言葉で表現できるよう指導する。
対話の実施 (11月～3月) (随時)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意見を言うことがうまくできない児童には、近くの友達だけとの1対1でノートに書いたことを発表することで、気軽に言える体験をさせ、相互評価しながら自信を持たせる。 (表現力)
もし、友達が約束を破ったら (アサーティブ的(積極的自己表現)コミュニケーション) (12月) 【特別活動】	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的コミュニケーションの話し方を体験して、「自分も大切、相手も大切」という考え方の大切さを理解させる。また、よりよい自己表現の仕方を身に付けさせる。そのために、言葉遣いによって、自分が伝えたい気持ちとは異なる気持ちを相手に抱かせてしまうことも体験させるなど、いろいろな会話例を示す。 (コミュニケーション能力)
小学校生活のまとめをしよう (12～2月) 【総合的な学習の時間】	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人の意見を交流させるために、友達の意見と同じ場合には「同じ」と言葉に出して賛成を言うこと、反対ならばなぜ反対するか、思っている範囲で理由を述べることを実際に示す。 (コミュニケーション能力)

エンカウンター 「ウルトラマンじゃんけん」(12月) 【特別活動】	・友達と手を握ってじゃんけんの種類を伝えることで、ふれあいながら活動する楽しさを知らせる。
4つのコーナー (1月) 【特別活動】	・どこに動いても間違いではないことや自分で意志を持って動くことの大切さを説明しながら、自分と異なる意見や立場を大切にできるようにさせる。
学習発表会 (2月) 【特別活動】	・1つの目標に向かい、協力して自主的に活動できるように支援する。 ・準備段階で様々な意見の食い違いや問題が出てくると予想されるが、問題が出ることは当たり前であり、あやふやにせず、はっきりと言葉にして解決していくように話す。当人同士で冷静さを欠く場合には、学級委員に聞いてもらうことも考えさせる。(問題解決能力)

(2) 保護者・地域との連携の視点と具体的な支援

① 保護者向けの便り

- ・月初めの学年便り（月予定などと共に人権教育コーナーを作り児童同士の良いかかわりの紹介をする）の発行。
- ・クラス便り（行事の前後や知らせたいことなどがある時に配布し、児童の校内での様子などを知らせる）の発行。
- ・週予定（学習予定と共に、言葉遣いや持ち物など、その週に気になったことを知らせる）の作成。

② 懇談会で学級運営の方針を説明する。

- ### ③ 4月の家庭訪問と7月の教育相談、12月の教育相談では、児童の変容を保護者と確認し合う。
- 資料として、学習の結果、児童自身が自分についての長所短所を書いたプリントを用意、自己認識と他者認識について話し合う。

5 効果的な指導を行うための課題

- (1) 児童の思いを聞くためにもじっくりと時間を作ることが必要だが、年間を見通して計画的に行わないと、時間が生み出せない。こうした場合、以下のような対応策が考えられる。

- ・教育相談週間を設定し計画的に全児童と話す機会を作る。
- ・行事に向けての児童の思いを書かせるなどプリントを利用してのやりとりをする。
- ・普段の日記で、「友達」「遊び」「悩み」等について書かせ、共感的なコメントを返す。
- ・毎日の学習時間の中で、児童が自分の考えを発表し合う場を意図的に設定する。教師が発表者の言葉を補ったり、質問したりすることにより、分かりやすい話し方について学習させていく。自分の考えを相手に伝える練習の場や思いを聞き共感できる場とする。この学習が、他の場面でも自分の考えを相手に伝えることにもつながっていく。

- (2) 職員が共通理解を図りながら児童を指導・援助するためには、お互いの指導方針を話し合うことが必要である。共通理解の場には、以下のような場合が考えられる。

- ・年度当初の児童指導計画を話し合う際に、重点目標を設定しながら、その目標に対してどのようにクラスなどで指導していくか話し合う。
- ・月末の職員会議の議題に「今月の児童指導について」を常に取り上げ、クラスの児童の様子について報告したり、問題行動等に対して担任の指導方針について説明を聞きながら、お互いに

どうかかわるか話し合う。

・朝の職員打ち合わせで、問題行動等について提案し指導方針を確認する。

(3) 校外活動や宿泊学習などでは、指導に曖昧さが出て児童が迷わないために、指導内容ごとに中心となる職員を決めておく。

(4) 活動内容によっては、担任以外の教員とのT・Tによって小グループでの話し合い内容を把握したり、その場での助言を行う。

こんなときどうするか2

同じクラスで過ごしてきたので、友達の良い面も悪い面も分かったつもりになっている。
固定されたイメージを変えたい。

「〇〇さんはいつもそうなんだから。〇△君はきっこうするよ。前から、◇〇さんはそうだよ」と、他人からのイメージが固定化されたり、逆に、本人自身が、自分を前のままのイメージで考えていることも多いようです。また、周りから良い子と評価されていることも、その児童にとってはストレスになってしまう場合があります。本人と周囲の評価や見方が異なることにより、悩んでいる子がいます。

1 日頃からその児童を観察してみましょう。

友達では気づかない部分があるので、教師が十分に観察し、その子の考えていることや実態を客観的にとらえて、理解できるように伝えてあげることが必要です。

2 再出発の機会を作る。

行事や長期休業明けなど、再出発の場として最適です。どんなめあてで活動に当たるか決意を記録したあとで、支援しながら達成できるようにします。途中のめあての達成度を相互評価しながら変容を認め合えるようにします。

合唱コンクールを活用した人間関係づくりのための指導・援助の在り方

1 テーマ設定の趣旨等

(1) 学校規模等

- ①普通学級 10学級
- 特殊学級 2学級
- 生徒数 320名

②市街地と農村部の境に位置する学校である。生徒は、明るくまじめに行動することができ、授業や学校行事、生徒会活動、部活動などに進んで参加している。

③米国の中学校との交流をとおして国際理解や親善が深まり、外国人にも親しみを持って接することができる。

(2) 生徒の人間関係に関する実態や課題

- ①自ら進んで発表することや表現することには、やや消極的である。
- ②自分の考えを正しい表現で相手に伝えることが苦手である。
- ③指示待ち的な面が多く見られ、他に依存的である。

(3) テーマ設定の理由

①入学したばかりの頃の緊張感もとれ、1年生も学校生活になれてきた。学級の「カラー」も鮮明になり始め、小グループ間の対立や、心ない言動から陰湿ないじめなども発生し、必ずしも良好な人間関係が構築されているとは言えない状況にある。

②そこで、9月以降の学校行事を通じて、人間関係の再構築を図ることにした。特に学級の団結力を示す絶好の機会としての「合唱コンクール」を中心に据え、一人一人に役割を与え、集団の中での「自己有用感」を高め、「仲間と協力して困難を乗り越える能力の育成」を目標として取り組むことを主眼とした。

③一人一人が「人との交流を通して自らの人格を高める」ために、自然教室におけるシルバー人材センターのお年寄りとの交流や、合唱コンクールに地域の人々を招くなど、人との交流の機会を意図的に多く持たせようと考えている。

※自然教室＝4泊5日で行われる野外活動。真岡市では、小4～中3まで対象に毎年行われる。

(4) 目標

①合唱コンクールの「選曲」「パート決め」「パート練習」「合わせ」などの活動の中で、それぞれの場面における意見の対立や、葛藤、協力などについて、話し合いを通じて問題を解決する能力を育てる。(問題解決能力)

②一人一人が集団における役割を認識することによって他者理解ができるようになり、集団内での自分のポジションを確認できるなど、メンバーシップの大切さを理解させる。

(共感性、適応力)

2 取組の方針

(1) 年度当初の学級指導では、仲間づくりのための指導（生徒同士でかかわる、何人かで活動する、そのやり方をお互いに学ぶ）を中心に展開する。

(2) 学級における教師の役割は、年度当初は「教え導く」立場であったり、あるいは「場に応じて個々の生徒への個別指導を行う」場面が多く見られる。様々な学年行事や学級活動を通して生徒の自主的活動を高め、教師自身も「学級集団の一員として参加する立場」にまわり、さらに「子ど

もにできることは子どもに任せる」段階へと、教師の役割を変化させていくことができるようにする。「雑音のような歌声」から「ハーモニー」へとレベルを上げていく中で、教師自身にとっても指導の在り方を学ぶ場としていきたい。

(3) 9月以降の行事にそれぞれの「ねらい」を設定し、明確にした。「4年間を通した指導・援助の在り方」参照。

3 指導内容

(1) 概要

①該当学年 1年

②学級ごとに歌う曲の選曲をする。曲は生徒と相談しながら、できるだけ生徒の考えを尊重して行う。

③学年単位で「最優秀賞」「優良賞」を選ぶ（保護者、地域に開放し、広く参観してもらう）。

③学級の「和」が大切であることに気づかせ、一人一人が学級内で「役割を持つこと」、「友人と協力して一つの大きなものを作り上げていくこと」の喜びを感じられるよう、パート練習などで自己有用感が持てるよう配慮する。

④「最優秀賞」は「学年の最高賞」としての栄誉が与えられることから、「競い合う」関係の中から、集団への所属意識や団結力を養い、よりよい学級集団へと導く。

(2) 指導計画

活 動 内 容	「人間関係づくり」のための指導上の工夫・留意点等
<p>1 事前における活動</p> <div data-bbox="193 1088 445 1254" style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> 合唱コンクールの概要を知り今後の活動計画を立てる。 (6月) </div> <div data-bbox="193 1339 445 1417" style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> 選曲をする。 (7月) </div> <div data-bbox="193 1503 445 1581" style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> パート決め (7月末) </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・学級で曲のCDを聴いた後、歌いたい曲をしっかりと理由を述べ発表するよう指導する。 (表現力) ・選曲にあたっては、男女間の考えの違いや、対立など、様々なトラブルが予想されるが、相手の立場に立って考えることができるよう、教師サイドとしてはあくまでも「援助的」立場で見守る。 (他者理解) ・小グループ間の対立による心ない言動があったり、合唱そのものに「後ろ向き」な生徒もいるはずである。自分の言動が相手に及ぼす影響について「道徳」の授業や話し合い活動と関連づけて気づかせる。 (協調性) <div data-bbox="501 1675 1390 2078" style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p style="text-align: center;">こんなときどうするか1</p> <p style="text-align: center;">クラスが小集団に分かれていて全体がまとまらない。</p> <p>人間は誰でも、集団の中に一人であることに不安を感じるものである。だから、集団の中になるとなんとなく気の合うグループがポツポツできるのも、ごく自然な事である。また、自分の学級に親しみが持てなければ、生徒は小さな「仲良しグループ」を作っていく。問題なのは、そうした小グループが、対立とは呼べないまでもお互いを牽制しあい、クラスがまとまらない状況が生まれることである。こうしたケースでは、教師がグループ間の問題</p> </div>

に介入しなければならない場面が多くなる。

その他に学級全体へ働きかけたり、援助したりする方法として、以下のような方法が考えられる。

- ・多くの他の生徒との交流ができるような働きかけを、教師が意図して行うことが大切（レクリエーションや、清掃分担区での配慮、グループ学習での班編制の配慮など）。
- ・多くの生徒と自然にかかわれるきっかけを、意図的に多くする（写真入り自己紹介カード、「学級便り」での数人ずつに分けた紹介記事）。
- ・授業での小グループ活動でも、できるだけ多くの生徒間の交流が行われるよう、教科の教員と連携を図りながら行う。

クラス練習開始

(9月)

- ・音楽の授業と連動して行う。また、帰りの会の一部を練習に充てる。
- ・生徒の意識が高まると「朝練」や休日の練習を申し出る場合がある。無理のない計画になるよう親身に対応する。

- ・この時期はまだ集団がうまくできあがっていない状態であることが多く、他人とのかかわり方を知らない子どもが集団不適應にならないよう配慮していく。 (他者理解)

- ・この時期は運動会等の練習と重なったり、行事が錯綜したりする忙しさから教師の目が届きにくく、生徒同士による不適切な言葉の表現や柔軟性を欠いた受け止め方など、些細なことから「暴力事故」が起きやすい。相手に自分の気持ちを正しい言葉や態度で伝える指導を、随時行っていくことが大切になる。 (表現力)

- ・うまく歌えない生徒への心配りなど、相手の立場を考えながら、感情的にならずに伝えることを心がけたり、友人と協力しながら解決に向けた取り組みができるようにする。

(コミュニケーション能力) (問題解決能力)

団結の意識を高める

(10月)

- ・他の学級との「交流会」「練習試合」的な要素を取り入れ、生徒の集団の一員としての役割意識を喚起する。

- ・友人のよさを認め、励ますことを心がけるよう指導する。 (他者理解)

- ・うまく歌えない箇所などを、友人と協力しながらその解決に取り組ませる。 (問題解決能力)

2 活動の実施

コンクール当日

- ・クラスの団結を示す場であることを改めて確認し、友人と協力して行うことの大切さを確認する。 (協調性)
- ・感情を込めた合唱を通じて、自己を適切に表現させる。 (表現力)

3 活動の評価とこれからの課題

(1) 評価について

①話し合いを通じて問題を解決する能力を育てる。

- ・必ずしもスムーズに行かない場面が多く見られた。ただ、自分の意見を一方的にまくし立てたりしても、他の生徒がついてこないことに気づいた生徒もおり、「伝えあう力」(表現

力)を身につけるためには、相手の立場に立った考え方が必要だということに気づいた生徒もいた。

②役割認識と他者理解、メンバーシップの大切さを理解させる。

- ・合唱は一人でできないことから、自己のポジション（役割）について知ることができ、さらに他と調和してやっていけない限り、物事はうまく進まないことを知ることができた。

(2) これからの課題と指導について

- おおむね目標は達成できた。しかし、能力的な面（音あわせが最後までできなかった生徒）で劣る生徒や、不登校の生徒が参加できなかった点は残念である。以後の活動で、歌はダメでも他の活動で自己有用感を持たせ、集団への帰属意識や役割などを体験させていきたい。

(3) 保護者との具体的な連携の在り方

①保護者に、合唱コンクールへの参観を呼びかける。

②当日の審査を保護者代表に委嘱し、審査員の一人として参画してもらう。

③ケーブルテレビを使って録画されたコンクールの様子を、地域に広く発信する。

④集団における自分の役割の大切さについて認識する機会でもあるので、家庭においても「子どもにできることは子どもに任せる」場を多く設けてもらうよう協力を呼びかける。具体的には「合唱コンクール」で学んだことを子どもたち全員に書かせ、学級通信に載せ家庭に発信する。「できるようになったこと」を具体的に伝えることで、親の代理としてできる仕事を家庭で見つけてもらうよう協力を要請する。

4 年間を通じた指導・援助の在り方

(1) 関連を持たせて指導することができる教育活動及び指導上の工夫・留意点

※○は、学級における「人間関係づくり」上の課題

活 動 内 容	「人間関係づくり」のための指導上の工夫・留意点
学級活動 オリエンテーション (4月)	○学級内における小集団化による閉鎖的な関係を打開し、新たな人間関係づくりがスムーズに行えるようにする。 ・構成的グループエンカウンターによる交流方法の工夫 ・学級間の交流、団結づくりのためのレク（昼休み大会）の企画 ドッジボール大会（表彰も行う） ・学級壁面への「自己紹介カード」の掲示 ・場に応じたあいさつや返事ができるようにする。 (表現力) ・職員室の入室方法を繰り返し指導する。 入り口に立って「◎年◎組◎◎です。◎◎先生に用事があってきました」と、職員室への入室の理由を、自分の言葉ではっきり告げさせる。 ※年間を通じての継続指導
学級活動 教科指導	○学級内におけるグループ間の対立の実態を踏まえ、よりよい人間関係を築くための方策を講じる。 ・清掃分担区の配慮（小グループ化の解消を考えて） ・グループ学習での班編成の工夫（〃） ・発言の際のルールを確認する（ディベートを取り入れた授業を通じて）。 (表現力)

<p>部活動</p> <p>総合的な学習の時間 (5月・6月)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・T P Oに応じた適切な表現ができるように指導する。 (表現力) ・部活動での「ルール」の確認。先輩や先生への場に応じた言葉遣い(敬語の適切な使い方)を指導する。 ・学校内外での「あいさつ運動」を広く展開する(生徒会との連携)。 ・論理的な思考に沿って自分の考えを表現できるようにする (表現力)。 <p>「総合的な学習の時間」でのグループ編成の配慮(広く交流を持たせる)</p> <p>電話での応対マニュアルに基づいた、企業の方との電話のやり取り方法を学ばせる(ロールプレイングを繰り返し、生徒間でやってみる)。</p>
<p>学級活動・道徳</p> <p>全校美化</p> <p>いじめアンケート1 教育相談 (7月)</p>	<p>○一部の生徒の、授業への意欲を欠いた態度や教師に対する反抗的な態度など、学級における人間関係づくりを阻害する要因が明らかになってくる時期である。学級の実態に応じて、道徳や学級活動のテーマを随時見直し、適切に実施する必要がある(雰囲気 マイナス方向に引っ張る多数派の意見が、学級を支配することを防ぐ)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・所属する集団や友人に働きかけたり、自らが変化しながら望ましい生活環境や人間関係を作ることができるようにする。 (適応力) ・「心のノート」や道徳の授業で、規範意識について指導する。 <p>清掃の意味を理解し、主体的に取り組むことができるようにする。 (規範意識)</p> <p>「清掃コンクール」による個人表彰、グループ表彰を実施し、清掃に対する意識の高揚を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他人の心情を自分のものとして受けとめ、相手の立場に立って考えることができるようにする。 (他者理解) ・道徳などで「心のノート」等を利用し、いじめアンケート結果をもとに、いじめ問題への理解を深める。
<p>特別活動の総合的な展開 (9～11月)</p> <p>運動会 自然教室(4泊5日) 合唱コンクール 文化祭</p> <p>総合的な学習の時間 (9月頃)</p>	<p>「人間関係づくり」に効果的な学校行事</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>9月以降の4つの行事を通して、学級における人間関係の再構築を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共通の目標を持たせ、学級の団結を図る(運動会)。 ・他の生徒と交流の機会を多く持たせ、ストレスのない関係を作る(自然教室)。 ・役割を与え、自己有用感を高める(合唱コンクール)。 ・親和的な雰囲気の中で、協力する意義を学ばせる(文化祭)。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・相手の考えや意見を真摯に受け止め、自分の考えを協調的、建設的に伝えることができるようにする。 (コミュニケーション能力) ・企業の方と、実際の電話の応対をやらせる(企業訪問の日程打ち合わせ、企業への質問等)。 ・企業訪問(「企業訪問マニュアル」によるシミュレーションを繰り返し行った上で、実際に訪問する)

<p>合唱コンクール (10月)</p>	<p>【これからの課題と指導】</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>おおむね目標は達成できた。しかし、能力的な面（音あわせが最後までできなかった生徒）で劣る生徒や、不登校の生徒が参加できなかった点は残念である。以後の活動で、歌はダメでも他の活動で自己有用感を持たせ、集団への帰属意識や役割などを体験させていきたい。</p> </div>
<p>特別活動 長縄跳び大会 (12月～1月)</p> <p>「校則の見直し」の 作業開始(1月～2月) (隔年で行う作業)</p> <p>いじめアンケート2 教育相談</p> <p>学級活動 (2月～3月)</p>	<p>○特に、「合唱コンクール」で力を発揮できなかった生徒には、「長縄跳び大会」で自己有用感を持たせ、集団への帰属意識や役割などを体験させていきたい。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・体育委員会を中心とした「長縄跳び大会」の企画 ・学級代表「実行委員」の選出 ・大会に向けての練習(12月～) ・大会の実施(1月) </div> <p>○「校則」について考えを述べる機会を多く持たせ、集団の一員としての自覚を高め、自己有用感を持たせる。 (問題解決能力) (表現力) (コミュニケーション能力)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「校則」について学級内での話し合いを行ったり、生徒集会の場で意見を発表する(話し合いのルールが身に付いているかをチェックする)。 <ul style="list-style-type: none"> ・再度、友人との関係を見直し、よりよい関係とはどうあるべきか再考させる。 (他者理解) <p>○1年間のまとめと反省</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「学級文集」を作成し(実行委員の選出、役割分担、校正、製本、配布)、特に、「合唱コンクール」や「長縄跳び大会」などの行事を通じて学んだことについて、文集への掲載欄を設ける。

(2) 保護者・地域との連携の視点と具体的な支援

- ① 「学校だより」「学級通信」「ホームページ」を利用して、地域や保護者に向け学校における多くの行事への参加を呼びかける。特に「学級通信」では一人一人の行事で学んだことをコメントに載せたり、次の機会に生かす心構えなどを掲載することで、自己有用感を高めるとともに、家庭との連絡を密にする場としたい。
- ② ケーブルテレビに取材に来てもらい、学校行事を通じて学校の取り組みを地域に発信する。感想や意見は学校のホームページやアンケートで吸い上げ、再度保護者に知らせる。
- ③ 「総合的な学習の時間」では、地域の企業(銀行、デパート、本屋、ガソリンスタンド)等との連携を図り、企業人とのやり取りの中で、表現力やコミュニケーション能力を養っていきたい。

5 効果的な指導を行うための課題

- (1) 教職員間の「意識の差」を埋める。特に学級担任の力量を発揮する場として、「学級対抗行事」は大きなウエイトを占めている。「行事に燃える学校」を目指すことで、集団から多くのものを生徒は学べるものである。教師自身の「熱」を高めていきたい。
- (2) 相互の行事を関連づけて、「生徒の何をどう育てたいのか」を、明確にしていく必要がある。相互の関係性が明確になれば、より効果的である。

こんなときどうするか2

一つの行事（活動）を通して、一人一人の人間関係が深まり、まとまりが出てきた。この雰囲気をずっと維持していきたい。

人間は共同して困難な仕事をやり遂げた時、大きな達成感を味わう。ましてや、まとまりのなかった学級が良好な人間関係を築き、大きくまとまっていくときの喜びは担任としても何事にもかえがたい喜びのはずである。

ただ、この雰囲気を維持することは意外に難しく、行事の余韻に浸って学級全体が騒がしくなったり、緊張感がなくなり学級全体が何となくだらしくなったり、目標がなくなって、また内部で対立したりする。

担任としての指導方法は、次のようなものが考えられる。

- ・学級という集団の中で、一人一人の生徒がさまざまな「経験」を積んでいけるような場を設定していくこと。
- ・小さな出来事や、係分担の中で集団のために役立つボランティア的な「動き方」を子どもたちに繰り返し教えていくこと。
- ・集団の中で役立っているという体験を味わわせながら、子どもたちに自信をつけさせ、主体的に参加しようという意欲を育てていく。

教師側の対応も「指示」が先になるのではなく、「自分たちでやろう」という自主的な雰囲気を作っていくことが大切になる。そのためには、

- ・学級におけるリーダーの育成とリーダーへの援助
- ・自主的活動への支援とうまくできたときの賞賛
- ・目立たないが、学級のために一生懸命活動をしている子への言葉かけ

などの配慮が必要となる。

そうした良好な雰囲気を作っていき、生徒ができることはできるだけ「任せる」立場に教師自身もまわっていくことが必要であろう。「生徒自身の力でやり遂げた」という体験を、行事や授業の中に多く取り入れることで、学級集団のまとまりを作り上げていきたい。



真剣な表情でクラス練習に取り組む様子

学校祭クラス参加を活用した人間関係づくりのための指導・援助の在り方

1 テーマ設定の趣旨

(1) 学校規模

- ①生徒数：800名 学級数：20クラス（1年－6、2年－7、3年－7）
- ②創立百年を越える男子普通科高校
- ③ほぼ100%の生徒が大学進学希望
- ④出身中学校数は約50校
- ⑤校訓は「質素堅実」

(2) 生徒の人間関係に関する実態や課題

中学校時に学力の面ではクラスのリーダー格であった生徒が少なくないが、一方で、自分の意志を周りに的確に表す事に対して消極的であったり、意志表現が苦手な生徒がいる。その原因は、生徒の通学地域が広く出身中学校総数が50校にも上ることで、ほとんどの生徒が初対面同士である事や、伝統的に控えめで謙虚な地域性が考えられる。

(3) テーマ設定の理由

大田原高校の最大の学校行事である「85km強歩」も5月下旬に終わり、1年生も学校生活にかなり慣れてくる。一見落ち着いて学習に取り組んでいるように見えるが、クラス内の人間関係を観察していると、いくつかの小グループがあり、社交性を発揮しリーダー的存在の生徒も見受けられるが、ほとんど孤立しているように見える生徒もいる。

そこで、1年生を対象に、クラス全員で取り組み作り上げる学校祭クラス参加活動を利用し、人間関係を構築する能力の基盤を作りを目指す。

(4) 目標

- ①新たな友達づくりを目指す。 (適応力)
- ②協力して問題解決に当たる能力の育成を図る。 (問題解決能力)
- ③相手の立場に立って接することができる能力や態度の育成を図る。 (共感性)

2 取組の方針

- (1) 準備段階から、意図的に意見を発表させたり、意見がぶつかり合う場面を設定し、表現力やクラスへの適応力を高めるための工夫を行う。
- (2) 学習に多くの時間を費やさざるを得ない生徒がほぼ全員であるので、学校祭の準備に係る時間だけでなく、普段からクラスにおける様々な活動を利用しながら、仲間づくりを進める指導を展開する。
- (3) 人間関係に関する能力を育てるためには、単に友達に同調したり、周りに合わせる調整能力だけではなく、高校生としての発達段階を踏まえて、一人一人が自らの主体的な意見や考えを持ち表現しながら友達とかかわり、物事を成し遂げていく力を身に付けることができるようにする。
- (4) 学校祭における指導を効果的なものとするための家庭や地域との連携の仕方について工夫する。

3 指導内容

(1) 概要

6月初旬に各クラス2名の大高祭実行委員からなる「第1回大高祭実行委員会」が開催され、

学校祭に向けた準備がスタートする。各クラスでは、実行委員会の話し合いをもとにしてクラス参加の出し物が話し合いで決められ、実行計画が策定される。

1 学年各クラス担任には、上記の「1 テーマ設定の趣旨」「2 取組の方針」を説明し、クラスの出し物が何であれ、これらを意識しながら、「人間関係づくり」の観点から、1年間の指導・援助の方法や留意点を具体的に考え、指導に当たるよう依頼する。

(2) 指導計画

活 動 内 容	「人間関係づくり」のための指導上の工夫・留意点等
<p>1 事前における活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クラス出し物の決定 (6月) ・実行班の決定 (7月) ・「活動カード」の配付 *下記参照 (8月下旬) ・準備活動 	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスの企画に関しては、全員が話し合いに参加しながら進めていくことができるようにする。少数の意見に支配されないように配慮する。 (コミュニケーション能力) ・実行計画を策定するとともに、必要な班(例えば、装飾班・賞品準備班・進行班等)を具体的に考えさせる。企画力のある生徒を中心に話し合いが進むことが予想されるが、その他の生徒も自分の意見やアイデアを発表し、それらを総合的に取り入れてクラス全体の計画が出来上がるようにする。全員が協力して何をなそうとしているのかを理解させ、生徒一人一人にやりがいと責任を持たせる。話し合いを通して各班の活動を修正する。 (協調性 適応力) ・一人一人に「活動カード」を配り、どのように活動するのか記入させることにより自分の役割を意識させ責任を持たせる。(自己理解) ・学校祭後に反省の時間を設け、「活動カード」を利用しながら、一人一人に、「新しい友達ができたか」「協力して問題解決に対処できたか」「相手の立場に立って接することができたか」等を確認させる。 (問題解決能力) ・準備段階では、クラス全体にはなるべく指示を出さず、生徒同士で現状を把握しながら課題を共有し、協力して作業を進めることができるよう見守る。(問題解決能力 協調性) ・夏休みを迎える頃になると、学校不適応を起こす生徒も見られる。特に、集団から孤立するとともに、自己の目標を見失っている生徒に対しては、自らの役割や責任が明確になり、自己肯定感を育むことができるよう援助する。
<p>2 活動の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当日公開 (9月) 	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスの出し物が円滑に実施できるように、学校祭当日の朝、それぞれの分担・任務を係ごとに再確認させる。実際の実施状況を良く観察し、新たな問題があれば室長中心に話し合って対処する。 (コミュニケーション能力)
<p>3 活動の評価とこれからの課題</p>	

(1) 評価について

※クラス全体で反省会を持ち、班ごとに評価を行う。また、学校祭の準備段階で作成した「活動カード」への記入を通じ、個人にも評価を行わせる。

①新たな友達を作ることができたか。

- ・班編成の関係で今まで話もしたことのない級友とも一緒に活動できるようになった。真の意味で、新たな友達になれたかどうかは今後の付き合い方にもよるが、少なくとも、新たな友達作りのきっかけになった。

②協力して問題解決に当たる能力を育成することができたか。

- ・生徒が事後の反省で書いた「活動カード」には次のようなものが目立った。

「話し合いがうまく行き、協力し合えた」、「話し合いで意見があまり出なかったの
で一人一人がもっと積極的に参加すべきであった」「自分から積極的に仕事ができ
た」「みんながばらばらで作業を進めたので、分担をもっとしっかり決めるべきだ
った」「皆で分担してうまく協力できた」

上記の反省からは、問題解決に当たってうまく協力できたとする生徒と、それが不十分であつた生徒がいたことがわかる。

③相手の立場に立って接することができる能力や態度を身に付けることができたか。

- ・学校祭のクラスの出し物の公開においては、一人一人が自分の係の責任分担を全うしなければ他の者に迷惑がかかる。生徒の中には、当日の自分の係を他の者に任せきりの生徒もいたが、かえってその事により「相手の立場に立って接すること」の意義や大切さを学ぶ機会にもなっていた。

(2) これからの課題と指導について

クラス全体としては目標に向かって協力し、生徒の多くが友人の枠を拡張、新しい人間関係を発展させていったが、孤立する者も見られた。担任は「活動カード」も参考にして後の個人面談や様々な活動において指導して行く必要がある。特に、孤立しがちな生徒については「活動カード」が次年度の担任が継続的に指導していく上で参考になるので、「活動カード」の形式も改善していく必要がある。なお、友人関係が円滑に成り立っていると見える生徒であっても、トラブルが生じたときの協力の仕方や問題解決の能力については、日々の生活状況を細かに観察し、よりよいものになっていくよう、指導を行う必要がある。

活動カード (書式やサイズは一部修正)

活動カード	
() 組 () 番	氏名
[] 班	
○班の仕事・目標	
○班内の自分の係	
[準備に際しての自分の活動]	[協力する仲間の名前]
・	・
・	・
[当日の自分の活動]	[協力する仲間の名前]

<ul style="list-style-type: none"> ・ ・ <p>【事後の反省】</p> <p>＜新たな人間関係ができたか＞ ＜お互いに協力できたか＞etc</p> <p>○具体的に：</p> <p>[うまく出来なかった場合]</p> <p>○なぜ：</p> <p>○どうすれば良かったのか：</p> <p>[その他]</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ・
--	--

(3)保護者との具体的な連携の在り方

- ・年度の初め、学校祭が生徒の人間的な成長を図るための意義ある行事であり、学年として、準備段階から実施計画の策定や実行等を、友人と力を合わせて進めていくことができる力を育てることをねらいとして指導することを伝える。家庭においても、人とかかわる力を育てる視点をもって、子どもに接してくれるよう依頼する。

4 年間を通した指導・援助の在り方

(1)関連を持たせて指導することができる教育活動及び指導上の工夫・留意点

活 動 内 容	「人間関係づくり」のための指導上の工夫・留意点
清掃活動	<ul style="list-style-type: none"> ・清掃班は年間を通した班として固定せず、一ヶ月単位で席替えなどを利用し編成し直し、なるべくクラス内で多くの生徒と一緒に活動できるようにする。責任分担を決めさせ、協力体制を確立させる。
学級当番指導	<ul style="list-style-type: none"> ・風邪等で欠席した生徒や部活動等での認欠生徒の欠課授業に対する級友同士のフォローを、学級当番により行う。例えば、その日の当番がノートのコピーを取ったり、授業の大事な点を書き留めて連絡する。親しくない生徒とも親しくなれる機会が与えられるとともに、やがては主体的に仲間に協力する姿勢を養うことができるようになることを目指している。学級当番は、週番ではなく日番とし、2人一組で充てることにしている。最初は番号順で、2巡目からは相方を替えることにより、なるべく多くの級友と仕事ができる機会を数多く与える事が大切である。 <p style="text-align: right;">(他者理解 共感性)</p>
部活動	<ul style="list-style-type: none"> ・担任は部活動顧問と密に連絡を取り、部内の人間関係を把握しておく。時間があれば、放課後の活動を見学し、その時の生徒の部員とのかかわり方や頑張り様を把握し、面接等で激励する。また、クラス内での人間関係についても部活動顧問に伝え、部活動における指導の面からもフォローしてもらう。

<p>教科指導</p> <p>各種委員会活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> 英語 I 又はオーラルコミュニケーションのプレゼンテーションにおいて、年度当初に英語で自己紹介させる。内容はなるべく自分の趣味や将来の夢・目標について語らせる。人前での発表が苦手な生徒に関しては担任とも連携を取り、積極的な姿勢が育成できるように協力する。 (表現力) 各種委員会活動の広報の時間を SHR で確保しておく。委員会活動は、生徒の自主性や表現力等を育てる活動としての大きな意義があり、活性化を図ることが大切である。なるべく多く広報するように働きかけるとともに、皆に分かりやすく伝えることに配慮をした連絡になるよう指導する。 (表現力)
<p>[学校行事]</p> <p>「85km強歩」(5月)</p> <p>前期生徒総会(5月)</p> <p>校内球技大会(10月)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 「85km強歩」は、人間関係づくりの観点からも意義ある行事である。準備段階からの協力や強歩中のお互いの助け合い、先輩から後輩への経験に基づく指導、各係間の連携協力、支援してくれる各地域のPTA支部との連携や交流等、様々な活動を通じ、「85km強歩」が、「歩き抜くことは個人の努力であるとともに、他者との協力や励まし合いがなければできないこと」であることを理解させる。 (他者理解 協調性 適応力) また、年度の当初に実施されることから、特に1年生にとっては、この行事を経験することによって大高生としてのアイデンティティが確立し、お互いの間に強い仲間意識が芽生える。そうした絆を、その後の諸活動を通じて更に深めていきたい。 クラスにおいて、室長から生徒会とは何かについて説明させ、生徒会の中で各種委員会が何を活動しているかクラス委員に説明させてから総会に臨ませる。全員が何らかのクラス委員になっているわけであり、生徒会における自分の役割や責任、生徒会全体への要望等について主体的に考えさせる。 (協調性 適応力) 「85km強歩」や学校祭など、他者と力を合わせて取り組む活動をいくつか経験してきているので、種目の決定やクラス練習など、生徒が主体的にかかわったり、いくつかの意見を調整して集団としてのまとまりのある行動がとれるよう、それらを見守る姿勢で指導に当たる。 (協調性 適応力)

(2) 保護者・地域との連携の視点と具体的な支援

③本校においては、最大のイベントである「85km強歩」により、学校・保護者・地域との間に連携体制や一体感が培われている。こうした条件を有効に利用し、学校が行う生徒指導の方針について十分に情報発信を行い、三者が一体となった取り組みを展開することにより、一層効果的な指導が可能となることが期待される。行事の際に、保護者や地域の方から積極的に声をかけ、言葉を交わすようにするなどの協力を依頼することができる。

- ④ P T A組織の中の「生活指導委員会」等を活用することができる。本校の場合は各支部内に数人の生活指導委員がおり（総数60名）、生徒の各地域における生活状況を定期的に「連絡通信用紙」や電話等を利用して報告してもらっている。学校外における、生徒の人とのかかわり方の実態について地域と学校が共有化することができるとともに、地域の行事に参加させるなど、地域とのかかわりの中で生徒を育てるための具体的なアクションを起こしてもらうことも可能である。

5 効果的な指導を行うための課題

- (1) 年間を通じ、全ての活動を通して人間関係を構築する能力を育成するためには、全教職員の共通理解と共同歩調が必要である。HR担任を中心としながら、それぞれの教員が、生徒たちに言葉をかけたり、生徒同士でディスカッションや作業をやらせてみるという視点に立って、学校全体で生徒たちの人とかかわる力を育て上げていくという意識を高める必要がある。
- (2) 人間関係を構築する能力を育成するためには、家庭・地域の教育力が大切であり、学校としてはいかにして具体的に連携を図るかが課題である。家庭に対しては特に担任が、地域に対してはP T A組織を活用して密接な関係を構築していく必要がある。

こんなときどうするか1

好き嫌いによる人間関係ができてしまい、気持ちの合わない仲間と一緒に活動したくない。

クラスの中に幾つかの小グループ（仲間）が形成されるのは自然であり、それ自体問題ではない。そのグループ（仲間）形成が、単なる好き嫌いによるものか、何かの利害関係によるのか、力関係（上下関係）によるものか、あるいはこれらの複合的なものか、それを見極めることが重要になる。

①特に理由がなく、好き嫌いの小グループができてしまった場合。

何に対しても好き嫌いがあるのは自然なことであるが、得てして、思いこみなどから対象となるものを遠ざけてしまう傾向にある。食べ物に対する「食わず嫌い」というのはその象徴であろう。国際理解の原点が、先ずその国の人と直に触れ合う事にあるように、クラスの中でも先ず友人と付き合ってみることが大切である。そのためには、こちらから一緒に活動したり、「席替え」などにより接触する機会を作ることが必要となる。

②理由がある場合

担任は、面談や清掃時における雑談等を利用して、理由を把握する必要がある。その理由が理不尽であったり、いじめ等の問題に発展している場合、担任は実態を早急に把握し、適切な対応をしなければならない。ただし、高校生の段階でもあるので、生徒自身の力で他人との付き合いの壁を乗り越える力もつけさせたい。教師が本人に対し、人とかかわる力に関する課題を個別に示してやるとともに、その課題を、どのように克服していくかを見守る姿勢も必要になるであろう。また、好き嫌いが誰にでもあることだとすれば、それをすべて解消することを目標とするのではなく、好き嫌いという個人的な感情とは別に、クラスメートとして円滑に付き合いしていくための最低限の対応法や、人とのそれぞれの距離感に応じた付き合い方について、様々な機会を通じて学習させる。将来、社会人として、それぞれが所属する集団の一員として、また不特定多数を対象とする人間関係の中で、周囲に適応しながら自己実現を図る能力を身に付けさせるという視点で指導を行うことが重要である。

こんなときどうするか2

クラスの決まりやルールを守らず、勝手な行動が目立つ生徒がいる。

基本的には担任教師の毅然とした姿勢が大切である。ルール違反を見逃したり、見て見ぬふりをせず、ルール違反の生徒を直接に担任が確認できた時は、担任がその場で的確に注意をするとともに、その後に必ず別室で時間をかけて生徒の話聞き、なぜ勝手な行動を取るのかを理解し、その後のその生徒の行動を観察し指導を続けることが必要になる。特に、勝手な行動は自分本位の発想から生じる結果でもあるので、自分の立場を集団の中でとらえさせたり、友人との関係において理解させたりするような指導の工夫が必要になる。様々な活動を通じ、リーダーとフォロワーの役割をすべての生徒に経験させ、皆が力を合わせて活動しなければ集団や社会が成り立たないこと、また、そのような集団の中で生活することが、自分の力を発揮したり個性を伸ばす上で、いかに大切な環境であるかについても学ばせる。

5 児童生徒による自己評価、教員による児童生徒理解のためのチェックシート

児童生徒による自己評価、教員による児童生徒理解のためのチェックシートを例示した。チェックシートは、児童生徒が自ら自己理解や他者理解等ができる発達段階を小学校高学年からと考えて作成した。

(1) チェックシートの内容及び構成、活用の仕方

① 評価項目について

人間関係を構築する能力に関する評価項目は、P 6 で示した表中の「人間関係にかかわる能力や態度」の9つの観点を基本に設定した。この9観点は、既述したとおり、「自他の理解」「他者や集団への適応」「他者と交流する実践力」の3つに区分したものである。チェックシートの評価項目は、この9観点の3区分及び項目に対応するようにし、その上で、児童生徒の理解を容易にするよう、それぞれの内容を平易に表現した。例えば、小学校高学年用のチェックシートでは、3区分のうちの「自他の理解」及び項目の「自己理解」は、「自分や友人はどんな人?」、「自分の良いところや悪いところを説明することができる」と表記した。なお、本来チェックシートの評価項目の表現は、児童生徒の発達段階に対応し、P 6 表中の人間関係を構築するために「育成することが期待される能力や態度」の具体的内容の各学校種の表現に一致させるべきところであるが、やはり表現を平易にするため、例えば高等学校用のチェックシートの評価項目であっても、部分的に中学校用と同じ表現を用いた。

② 評価の記入方法について

評価については、それぞれの評価項目に応じて、年度当初と年度末の二度実施するようにした。年度当初の自分をまず把握した上で、年間の教育活動を通じて自分自身がどのように変化・成長したかを確認するのがねらいである。評価の仕方は、「良くできた」を最高値の4として、以下段階的に数値を記入するようにした。

また、各区分ごとに、1項目は年度の最後にのみ評価する項目を設定した(各シートの網掛け及び矢印部分)。特に、その項目については、具体的な記述を通して自らを深く考察させることをねらいとしている。

最後に、1年間を振り返って自ら良くなった点(高等学校は変化した点)とともに、次年度及び今後の自らの課題となることについて、記述を通して明らかにさせることを意図して作成した。

なお、チェックシートによる評価は、基本的には一年間の活動を評価するものとして利用することが望ましいと考えられるが、学期単位に評価したり、活動の前後で評価してみることも可能である。利用の仕方は、各学校の実態に応じて検討願いたい。

(2) チェックシートの活用方法や効果

① 児童生徒の活用

児童生徒に対しては、自己評価を通じて自らの現状と一年間の成長について自己理解を深め、これからの課題を明らかにさせるとともに、自らの成長の記録として保存させることにも意義がある。評価は、適宜時間をとって実施する。

②教師の活用

チェックシートは、自己評価させた後に担任が回収、保管するなどして、学級（クラス）内の個人と集団における、それぞれの存在意義や立場について把握したり、相談や面接の際の参考資料として、効果的に利用することが期待できる。

③効果

チェックシートを児童生徒に示し、その評価を児童生徒及び教師が共有することは、「人間関係を構築する能力」を身に付けるために、どんな能力や態度が必要となるのかを児童生徒に意識させることにつながるとともに、教師自身にも指導目標を明確化させる効果を生み出すものと考えられる。児童生徒に評価項目を示すということは、教師（学校）側に対しては、絶えずその項目が指導目標となることを意識付けるとともに、その評価のための活動の場や機会を意図的・計画的に準備すべきことを求めることになる。チェックシートが単なる評価のためのツールに止まることなく、各学校における計画的な児童・生徒指導を展開するため、効果的に利用されることを期待したい。

チェックシートは、栃木県教育委員会ホームページ「先生のためのページー児童・生徒指導ー」に一太郎の書式で掲載してありますので、ダウンロードの上、各学校の実態に応じて活用願います。

(3)チェックシート
①小学校高学年用

あなたは友人と仲よくすることができますか？

年 組 氏名

よくできる 4 まあまあできる 3 あまりできない 2 全くできない 1

自分や友人はどんな人？

- 自分の良いところや悪いところを説明することができる。
- 仲の良い友人の性格を、だいたい説明することができる。
- 友人の立場に立って物事を考えようとするすることができる。
- 友人とのつきあいの中で、自分の良さを新たに見つけることができた。

年度初	年度末

⇒それは、どのような場面で発見することができましたか？

友人と一緒に行動すること

- クラスや学校の決まりを守って行動することができる。
- あまりつきあいのない友人とでも係活動やグループ活動を行うことができる。
- 自分から友人に働きかけて、係活動やグループ活動のためにアイデアを出したり意見を言ったりできる。
- 新しい友人を作ったり、友人とのつきあいを広げることができた。

年度初	年度末

⇒それは、どのような活動やきっかけによってですか？

友人とのつきあいをより良く行うこと

- 相手が何を考えているかを思いやった上で話しかけることができる。
- 自分の考えや意見を、相手がわかりやすいように話すことができる。
- 自分と違う考え方や意見についてもしっかりと話を聞き、それを受け止めて答えを返すことができる。
- 困ったことや問題点を解決しようとする時、自分だけの力ではなく、友人や先生の意見も参考にすることができた。

年度初	年度末

⇒それは、具体的にどのような場面で行うことができましたか？

最後に、この1年間を振り返って、友人とのかかわり方で自分が成長したと思う点と、これからがんばらなければならない点をまとめてみましょう。

(成長したと思う点)

(がんばらなければならない点)

②中学校用

あなたは友人とうまく付き合うことができますか？

年 組 氏名

よく当てはまる4 まあまあ当てはまる3 あまり当てはまらない2 全く当てはまらない1

自分や友人を知ること

年度初	年度末

- 自分の長所や短所がわかっている。
- 仲の良い友人の長所や短所が、おおよそわかっている。
- 相手の立場に立って物事を考えることができる。
- 友人との付き合いの中で、自分の良さを新たに発見することができた。

⇒それは、どのような場面で気づきましたか？

友人と一緒に行動すること

年度初	年度末

- クラスや学校のルールを守って行動することができる。
- あまり付き合いのない友人とでも係活動やグループ活動を行うことができる。
- 自分から友人に働きかけて、係活動やグループ活動のためにアイデアを出したり意見を言ったりできる。
- 新しい友人を作ったり、友人との付き合いを広げることができた。

⇒それは、どのような活動やきっかけによってですか？

友人との付き合いを円滑に行うこと

年度初	年度末

- 相手が何を考えているかを理解しようとした上で話しかけることができる。
- 相手が理解できるように、自分の考えを筋道を立てて話すことができる。
- 自分と違う考え方や意見についてもしっかりと話を聞き、それを受け止めて答えを返すことができる。
- 自分だけで問題や課題を解決しようとするのではなく、友人や先生のアドバイスを受けながら解決に当たることができた。

⇒それは、具体的にどのような場面で行うことができましたか？

最後に、この1年間を振り返って、友人とのかかわり方で自分がよくなった点と、これからの課題をまとめてみましょう。

(よくなった点)

(これからの課題)

③高等学校用

あなたは友人とうまく付き合うことができますか？

年 組 氏名

よく当てはまる4 まあまあ当てはまる3 あまり当てはまらない2 全く当てはまらない1

自分や友人を知ること

年度初	年度末

- 自分の長所や短所がわかっている。
- 友人の性格や行動の仕方が、おおむねわかっている。
- 相手の立場に立って物事を考えることができる。
- 友人との付き合いの中で、自分の個性を新たに発見することができた。

⇒それは、どのような場面で気づきましたか？

友人と一緒に行動すること

年度初	年度末

- クラスや学校のルールを守って行動することができる。
- あまり付き合いのない友人とでも係活動やグループ活動を行うことができる。
- 自分から友人に働きかけて、係活動やグループ活動のためにアイデアを出したり意見を言ったりできる。
- 友人との付き合いを広げたり、付き合い方が変わった。

⇒それは、どのような活動やきっかけによってですか？

友人との付き合いを円滑に行うこと

年度初	年度末

- 相手が何を考えているかを理解した上で話しかけることができる。
- 相手が理解できるように、自分の考えを筋道を立てて話すことができる。
- 自分と違う考え方や意見についてもしっかりと話を聞き、それを受け止めて答えを返すことができる。
- 自分だけで問題や課題を解決しようとするのではなく、友人や先生のアドバイスを受けながら、積極的にそれらの解決に当たることができた。

⇒それは、具体的にどのような場面で行うことができましたか？

最後に、この1年間を振り返って、友人とのかかわり方で自分が変わった点と、これからの課題をまとめてみましょう。

(変わった点)

(これからの課題)

6 平成17年度 児童・生徒指導推進委員会委員 (五十音順)

	氏 名	所 属 ・ 職 名 等	備考
1	赤上 純子	栃木県総合教育センター教育相談部副主幹	
2	石河 雅規	真岡市立真岡東中学校教諭	
3	岩間 寛行	那須塩原市教育委員会児童生徒サポートセンター副主幹兼指導主事	職務代理
4	橘川 真彦	宇都宮大学教育学部教授	委員長
5	後藤 浩明	栃木県総合教育センター研究調査部指導主事	
6	小林 薫	栃木県高等学校PTA連合会副会長	
7	渋江 隆夫	佐野市立三好小学校教諭	
8	田淵 光与	栃木県総合教育センター幼児教育部副主幹	
9	中田 幸子	あかみ幼稚園教諭 (主任)	
10	中村 健一郎	鹿沼市教育委員会指導主事	
11	氷室 清	上三川町立坂上小学教諭	
12	藤田 武志	大田原高等学校教諭	

【これまでの主な指導資料等】

○平成11年度

- ・「学級・ホームルーム担任のための教育相談第11集 気になる子の理解と対応」
総合教育センター障害児教育・相談部
- ・「いじめの予防と解決への組織的対応」
総合教育センター

○平成12年度

- ・「児童生徒指導の指針―心豊かな栃木の子どもを育てるために―」 児童生徒指導緊急対策室
- ・「不登校の理解と対応」 総合教育センター障害児教育・相談部
- ・「『いじめ』の解決・再発防止」 総合教育センター
- ・「いじめの理解と対応」 総合教育センター

○平成13年度

- ・「具体的な取組事例―小学校児童の中学校進学に当たっての不安解消のために―」
児童生徒指導推進室
- ・「児童・生徒指導に関する危機管理マニュアル作成資料」 児童生徒指導推進室
- ・「平成14年度幼稚園・小学校・中学校 指導の指針」 義務教育課
- ・「平成14年度県立学校における指導の指針」 高校教育課
- ・「児童生徒の健全育成を目指して(19)―豊かな人間関係づくりのための10の方法―」
義務教育課
- ・シリーズ子ども理解と学級経営①「いじめや不登校を防ぐために」
―子ども一人一人を十分に理解しよう―発達学級地図を用いて―
総合教育センター教育相談部
- ・シリーズ子ども理解と学級経営②「いじめや不登校を防ぐために」
―簡単にできる「学級事例研究」の進め方― 総合教育センター教育相談部
- ・「新年度のスタートは子どもにとって不安がいっぱい」 総合教育センター教育相談部
- ・「不登校児童生徒の援助・指導の在り方」に関する調査研究（中間まとめ）
総合教育センター教育相談部

○平成14年度

- ・「不登校の解消に向けた方策について」
（平成14年度児童・生徒指導推進委員会協議のまとめ） 児童生徒指導推進室
- ・「不登校対策特別研修会資料」 児童生徒指導推進室
- ・「平成14年度幼稚園・小学校・中学校 指導の指針」 義務教育課
- ・「平成14年度県立学校における指導の指針」 高校教育課

○平成15年度

- ・「暴力行為を予防するための方策について」
（平成15年度児童・生徒指導推進委員会協議のまとめ） 児童生徒指導推進室
- ・「児童・生徒指導資料―児童生徒指導の充実を目指して―」 児童生徒指導推進室
- ・「平成15年度幼稚園・小学校・中学校 指導の指針」 義務教育課
- ・「平成15年度県立学校における指導の指針」 高校教育課

○平成16年度

- ・「場に応じた適切な判断力を育てるための指導・援助の在り方」
―加害者にも被害者にもさせないために―
（平成16年度児童・生徒指導推進委員会協議のまとめ） 児童生徒指導推進室
- ・「平成16年度幼稚園・小学校・中学校 指導の指針」 学校教育課
- ・「平成16年度県立学校における指導の指針」 学校教育課

平成17年度 児童・生徒指導推進委員会協議のまとめ
「望ましい人間関係を構築する能力を育成するための
指導・援助の在り方」

平成18年3月

発行 栃木県教育委員会事務局 学校教育課児童生徒指導推進室

〒320-8501 栃木県宇都宮市埜田1-1-20

☎ 028-623-3359

<http://www.pref.tochigi.jp/index.html>

(教育委員会－「先生のためのページ」)